

で具體的な振興策を説いた長文のものである。

今その問の部分だけをあげてみよう。

一、方今天下興隆の大機會なり。更張の道様々なる可し、就中至急の要領は如何。
一、強兵の道人に見るところ異なり。或は固有の短兵を主張し、或は西洋の銃陣を主張す。二者の外強兵の實用ある可き哉。

一、諸夷を引受くるは勿論なり。我が固有の義勇を振ひ海港の要衝を取り固め必死の戦闘を爲す時は必ずしも敗を取道には非ず。是又強兵にあらず哉。

一、海軍を起す可きは聞えたり、是を強兵と云ふは如何。

一、海軍を起すの所置如何。

一、天下列藩は如何。

一、天下列藩の疲弊極れり。海軍を起さば更に疲弊を重て却て紛擾を生ずるに至る可し。如何。

一、軍艦は彼より買ひ入ると我にて製造すると何れが可然や。

右の中で「海軍を起すの所置如何」に對する「答」の一節をあげてみよう。

「方今の憂は天下列藩各々便利を占め人心一致せざるより大なるはなし。四海萬國を引き受ずして叶はざる時勢と成り、國一致せずして何を以て天下を興さん哉。況んや新なる海軍を起すに尤も以一致の所置に出ずんば有る可からず。今幸に天朝、幕府兵庫に於て海軍を起すの命令を出されたり。兵庫は大坂の咽喉にて本邦第一の要港なれば海軍場には至極の形勢を得たりと云ふ可し。於是更に亦維新の令を出し左の件々の大綱を天下に布告す可し。

一、總督官に海軍一切の全權を命じ、嚴に有司之法の率制を禁す。

一、列藩に海軍を起す大趣意を示し、並に志し有る人は此に來り修行す可を諭す。

一、此に來り修行する人は衣食の用度官より之を給す。

一、總督官諸生を率て長崎に出張し、洋人を呼迎へ三年を期し傳習せしむ。

一、海軍場中信賞必罰、嚴に軍法を以て行ふ可し。

總て傳習には費用を厭ふことなく十分の修行を盡さしめ、海軍一切の規定は西洋の法則を斟酌して行ふ可し。本邦の人の聰敏なるは洋人も亦嘆美して亞細亞洲第一と稱し、尤事を爲すに曉ければ、三年を待たず海軍の術我是を得ること疑無し。傳習既に熟するに隨ひ別に將校を用ることを禁じ、總て此の諸生をして軍艦の職役を命じ、其才能長技に隨て任用し匹夫たり共一艦

の長一軍の將にも擧げ用ひ、貴族たり共所長なければ用ひず、一切太平因循の習弊を去り、軍國嚴齊の法則を行ひ信賞必罰威令上に明なるときは一軍齊肅命を用ひざることを得ず。且夫海軍の實用たるや海外の事情に達し器械の精微を盡し萬里の風濤を凌ぎ更に又各國戰鬥の實地を見聞せずんばある可らず。軍艦十艘にも及びなば代る海外に乗り出し各國を巡視するときには聰明を開き膽氣を壯にし、彼が長を取りて我短を制し、十年を待たずして全國の人心奮勵發動し、外夷の恐るるに足らざるのみならず却て萬國を呑むの正氣を發生するに至り、今日恐怖の人情に比するに眞に晝夜明暗の變するが如くなる可し。方今海外の各國英夷尤も強大と稱す。其國たるや地球の西北に偏する一孤島なれ共環海の便利に因て今日の盛大を爲すに至る。本邦は地球の中央に位し環海の便利四通八達英に勝ること萬々なるのみならず、人質の聰明にして勇銳なること更に又外國の比類す可に非れば、盛運年を遂に隨て非常聰明の人傑輩出し我が大道を明にし、我が義勇を盛し外夷をして理屈し鋒挫け遂に我が仁義の風を仰ぐに至らしむること今日海軍を起すに本づくに非らんや。」

この「海軍問答書」は、實際に小楠との問答をもとにした書いたもので、その終には、「有容

來訪言及時事、反覆討論相共三嘆、客曰可識哉、乃次第其言如此。」と記してある。ここに擧げた「海軍を起すの所置如何」だけを讀んでも、その熱意を知ることができし、殊に英夷と我が國とを比較して論じたところなどは、大東亞戰爭によつて、文字通り世界第一の海軍國となつた今日を、百年前に豫言してゐるやうである。

開國論者であり、海軍論者であつた關係もあるが、小楠と勝海舟との交情は特に深かつた。小楠が江戸から歸つてからも、しきりに勝とは文通してゐるが、勝海舟は、元治元年、長崎に來た時、坂本龍馬を沼山津に遣はして、謹慎中の小楠を訪問せしめた。それは家祿も沒收されて生計にも困窮してゐる小楠のために金員を贈らせるためであつた。この時、小楠は、二甥を海舟に依頼した。

この坂本龍馬は、江戸にある頃から小楠をたびたび訪問してゐるが、沼山津にはこの時、勝の使として訪問したほか、慶應元年、薩長聯合のため奔走の途次にも立ち寄つてゐる。その時の様子を、徳富蘆花が父淇水の談話を筆記したものとすると、坂本は白の琉球絣の單衣に鍔細の大小をさした色の黒い大男であつたが、その時酒の上で人物論が出た。小楠と龍馬とは大久保はどうだ、西郷はどうだと論じた後、小楠が龍馬に「乃公はどうだ」ときくと、龍馬は、「先生はまあ

二階に御座つて綺麗な女共に酌でもさして酒をあがつて、西郷や大久保共がする芝居を見物なさるがようござる。大久保共が行きつまつたりしますと、そりやちよいと指圖をしてやつて下さるとようございませう」と答へたので、小楠は哄笑して頷いたといふことである。龍馬は後に兄に與へた書簡の中で「當時天下の人物と云へば、徳川家にては大久保一翁、勝安房守、越前にては光岡八郎、長谷部勘右衛門、肥後にては横井平四郎、薩摩にては小松帶刀、西郷隆盛、長州にては桂小五郎、高杉晋作」と數へてゐるところから見ても、龍馬が小楠の人物をいかに評價してゐたかを知ることができる。

海舟といひ龍馬といひ、皆、海軍擴張論者であつたので、小楠とは同志的な親しみがあつたであらう。小楠が、横井左平太と横井太平の二人の甥を勝に依頼したことは前にも出たが、「小傳」にもあるやうに小楠はこの二人をして海軍軍事修業のために勝海舟の塾に入れたのであつた。しかしその後、勝が幕府の命によつて軍艦奉行も免ぜられ神戸操練所も閉鎖の止むなきに至つたので、この二人は長崎に歸つて語學を修業し、元治二年四月、小楠の世話で渡米の途についた。罪を得て謹慎した小楠は、二人の甥をして自分の理想を實現させ、時局下に國家有用の人物たらしめようとしたのである。しかし、海外留學は肥後藩では國禁となつてゐたので、二十二歳の兄の

左平太は伊勢佐太郎、十七歳の弟大平は沼川三郎といふ變名を使はせることにした。

二人の出發にあたり小楠は次のやうな送別の詩を作つてゐる。

堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を盡くす。

何ぞ富國に止らん、何ぞ強兵に止らん、大義を四海に布かんのみ。

心に逆ふこと有るも人を尤むること勿れ、人を尤むれば徳を損す。

爲さんと欲する所あるも心に正にする勿れ、心に正にすれば事を破る。

君子の道は身を修むるに有り。

これは、百年後の今日でも、洋行を送る詩として、意味深いものがある。

しかし、この二人は共に百數十日の航海の後、大西洋をわたつて無事渡米し、ともに航海學校に入學して新しい航海術を修業した。弟大平は滯米三年、肺を病んで歸朝したが明治四年二十二歳で死亡し、兄左平太も滯米六年で歸朝し、再び官命によつて渡米、二年にして歸朝し、明治八年、元老院の書記官となつたが、その年弟と同様肺患のため三十三歳で死亡した。かくして二人とも病のため小楠の意圖を十分に實現することはできなかつた。しかし、この二人の青年の渡米

は、それだけでも當時の青年に開國進取の氣象を鼓舞するところがあつたであらう。

小楠は後には、天主教を我國に宣傳する賣國奴であると誤解されさせたほど、歐米文化に對して進取的であつた。彼はワシントンを崇拜した。慶應三年六月、米國にある二甥に與へた書簡には次のやうな一節がある。

「既に西洋列國是迄有名之人物を見候てもアレキサンデル、ベイトル、ボタマルニ杯之類所謂英雄豪傑之輩のみにてワシントンの外は德義ある人物は一切無之、此以來もワシントン段の人物も決して生ずる道理無之、戦争之慘怛は彌以甚敷相成可申候。我輩此道を信じ候は日本、唐土之儒者之學とは雲泥之相違なれば今日日本にて我丈を盡し事業の行れざるは是天命也。唯此道を明にするは我が大任なれば終生之力を此に盡する外念頼無之候。」

これによつて小楠がいかに西洋文化に對して關心が深かつたかがわかる。しかしながら小楠は決して西洋文化の盲信者ではなかつた。それは同じこの手紙の中で、次の如く述べてゐるのも明瞭であり、西洋文明の功利性を認めてゐたのである。

「西洋列國利の一途に馳せ一切義理無之、就ては二典三謨熊澤書彌信仰之段甚以致大慶候。此許にても夫のみ及講習候。富國強兵器械之事に至りては誠に驚入たる事業にて今日程盛大成るは前古より無之之至れり盡せりと可申、唯一途のみ取り用ふべき事にて道に於ては堯舜孔子之道之外世界に無之彌以分明に候。一言にて是をいへば西洋學校は稽業の一途にて徳性もみがき知識を明にする學道は絶て無之、本來之良知を一稽業に局し候へば其藝業之外はさぞかし暗き事と被察候。」

ここに、「一言にて是をいへば西洋學校は稽業の一途にて徳性をみがき知識を明にする學道は絶て無之」と明言してゐるのである。

かうしてはつきり西洋文化の本質を認めた上で彼は「苟くも我を用ふる者あらば吾當に使命を奉じて先づ米國に説き一和協同し、然る後に各國に説き遂に四海の戦争を止むべし」といふ世界觀を抱いてゐた。したがつて、二甥を渡米させたのは、この小楠自身の希望を代へて實現させようとしたものであらう。

第十章 最後

★「三年徳川氏表を上て將軍職を辭し大政を奉還す、先生報を得て云ふ事茲に至る、天下將に定まらんとすと、

明治元年三月徴士の命を蒙り、京師に出づ、制度局の判事に任ず、幾ばくも無くして參與に拜す、從四位下に叙す、此時先生年齒最も高く太政官中の老先生たり、上下に敬重せらる、先生經國の志將に大に伸んとす、然るに天先生を慶せず、病魔頻りに臻り大に事に任ずる能はず、嘗て病篤し、門人に口授して遺表を草せしむ、而して病稍癒ゆ、上つらずして止む、朝廷將に顧問に任ぜんとす、先生も亦其任に當らんと欲す。

二年正月五日退朝、途寺町を過ぐ、兎徒十二三名短銃を放て突然輿に迫り先生を刃せんとす、先生輿を排して出、短刀を以て抗す、病餘衰憊防遏すること能はず、終に賊刃に斃る、勅使來て、皇上痛悼の聖意を傳へ、而して金幣若干を賜ふ、門生從僕の負傷する者亦醫療金幣等の恩賜有り」(小傳)

尊皇思想の昂揚、對外問題の緊迫、封建制度の行詰り、財政の窮乏等々の複雑なる動因によつて、佐幕派の策動にもかかはらず、徳川幕府の權威は日に顛落するばかりとなり、時勢は遂に慶應三年十月十四日、十五代將軍徳川慶善の大政奉還となり、ここに明治維新の新時代となつた。そこには、坂本龍馬等の薩長聯合運動や土佐藩の大政奉還の建議などが、新時代への推進力として、大きな働きがあり、從つて坂本龍馬や勝海舟等と同志的につながる横井小楠の達識もまた、この新時代の轉換のために役割をはたしてゐたことは明かである。小楠としては、ここ五年間は、個人的には今は敗殘の身を故山に潜めて徒らに天下の形勢を傍觀するに止つてゐたが、しかし今かうしてかねての理想の實現される形勢に立到つたのをどんなに歡んだことであらう。

慶應三年十二月九日には、王政復古の大號令が換發せられ、攝政、關白や幕府などの舊政治組織は全廢せられ、まづ總裁、議政、參與の新制度を創始した。有栖川宮熾仁親王を總裁に、山階宮晃親王、仁和寺宮道純仁親王、中山忠能、三條實愛、中御門經之、徳川慶勝、松平慶永(春嶽)淺野茂勳、山内豐信、島津茂久等を議定とし、大原重徳、萬里小路博房、長谷信篤、岩倉具視、橋本實梁等を參與としたが、更に、徳川慶勝、徳川慶永、淺野茂勳、島津茂久等に命じて參與と

すべき各藩士三人を推戴させることとした。

王政復古の大號令の中に、

一、舊弊御一洗ニ付言語之道被洞解候間見込有之向者不拘貴賤無忌憚可致献言且人材登庸第一之御急務ニ候故心當之仁有之候ハハ早々有言上候事

の一項がある。明治維新の大精神のもとに人材登庸の道が大きく開け、ここに明治維新の強味があつた。

かくて同年十二月十八日には肥後藩に對しては、長岡護美と横井小楠を參與として御召の達書が送達された。肥後藩としては、既に士席を削つて謹慎させてあつた小楠が、新政府の中樞に參與として拔擢されるといふので、あまりのことに例によつて藩内に異端があつた。そこで藩では「右平四郎儀近年病躰罷成居候事に付如何體にて朝廷之御用に難ニ指出ニ御座候間、此節、御召之儀は乍レ恐被レ遊ニ御免ニ被レ下候様奉レ願候」といふ願書を出し、病氣を申し立てて斷ることとした。しかし新政府の小楠御召の儀は動かすによしなく、殊に岩倉具視は、小楠辭退の書を出した長岡護美に對する返書にかう答へた。

昨日御書中之處御用繁御即答に不能、失禮此事に存候。然ば横井平四郎依レ召上京之處、先年

江戸表におゐて云々却て巨細御書付御示諭何も令ニ承知ニ候。段々御入念之儀にては候得共右等決して御心配には不レ及、兼て人才之趣聞食被レ入、此度御用召之儀に候間早々可ニ罷出ニ候様御取計可レ給候。尤三條始示談の上御答には候條御安心可レ被レ下候。」

これによると病氣以外にいろいろ具申してゐるやうであるが、さういふ點は問題にならなかつたやうである。

かつて坂本龍馬が作った朝廷に建白すべき意見書の中に、關白、議奏、參議の三職を置くべしとし、參議として九人の名をあげた中に横井小楠もあつたといふし、新政府の根本方針ともいふべき五箇條の御誓文の起草者の中には、小楠門下の由利公正（三岡八郎）があり、議定に春獄あり參與に岩倉具視がある。かうして新政府に小楠の登場はまさに天下の輿望であつた。

いづれにしても肥後藩の御斷にもかかはらず。三月にいたり、「横井平四郎、御用候間早々上京可レ爲レ致候事」の命が重ねて下つたので、肥後藩でも今は止むなく、小楠の士席を復して出京させることとした。

心ならずも悠々閑居、五ヶ年の沼山津生活もここに終りを告げることとなつた。六十歳にして

再びめぐり来る新しい使命に小楠は挺身して御奉公を誓つた。

明治元年四月八日、小楠は、いよいよ百貫石港から肥後藩船凌雲丸に乗つて、輝かしい上京の途についた。

大阪に着いた時恰も 明治天皇御親征のため大阪行在所にあらせられたが、そこには、小楠門下の越前藩士三岡八郎（由利公正）が、參與として、供奉を命ぜられてゐた。三岡は新政府の財政方面に重用せられ、今回の行幸にも御用度金十萬兩を調達して、その手腕を發揮してゐた。この財政的手腕はもとより師の小楠の教導よろしきを得た結果である。三岡が小楠を歓迎したのはもとよりである。文久三年、長崎で別れて以来、語る機會のなかつた師弟が、今は等しく新政府の要職に活躍する身となつたよろこび、また小楠としては自分の教育した教へ子が、かつては一藩の財政家として成功したが、今は全國的の財政家として理想實現のため目のあたり活動するのを見て、いかに満悦したことであらう。この時も、小楠はやはり三岡を教へ勵ますことを忘れなかつた。

後に三岡は當時のことについてかう述べてゐる。

「明治元年應召シテ出京ノ時、生大坂ニ出テ之ヲ迎フ、先生謂テ曰ク、我邦世界無比ノ幸福ヲ

リ、皇統ノ一系之ナリ、加ルニ後レテ開ク是亦一ノ幸ナリ、他日大イニ成ル事アルベシ、唯君徳ヲ補翼シ奉リ條理ノアル處ニ任スレバ開明無比ノ域ニ達セン敢テ疑ヲ容レス」

なほ、大阪から郷里に送つた小楠の書簡には、上京のよろこびを次のやうに報じてゐる。

「先に出立前は何角御配意被_レ成下_レ忝々奉_レ存候。着後舊病も次第に快き方にて仕合に御座候。日々多忙の至誠に困り入申候。只今通りにては老體實以たまり不_レ申、御憐察可_レ被_レ下候。四位の參與古今無比類ニ仕合深く恐懼仕、何ともいたし様無_レ之候。

關東も服罪に落着、會津いまだ無事に治り不_レ申、是は必ず一戰に相成可_レ申候。

主上いまだ御滞坂、不_レ遠御歸京と奉_レ存候。其節私も上京可_レ仕候。」

かうして小楠は四月はじめ上京して徴士參與を命ぜられたが、間もなく太政官に出仕し制度局判事を拜命、ついで徴士參與から參與に任命せられ、從四位下に叙せられた。

當時、小楠が郷里に送つた書簡には、この異常の拔擢について感激の心境を次のやうに報じてゐる。

「私儀去る廿一日參與之内より撰出被_レ仰付_レ翌日別紙之通り破_レ仰付_レ誠_レに以て無_レ存懸_レ難_レ有

仕合何とも申上様無_レ之次第に御座候。」

「小拙此節太政官御教正格別之御拔擢被_二仰付_一從四位下に拜任、匹夫の身誠に未曾有の天寵を蒙り實以奉_二恐入_一候」

「禁中日々多事繁用誠に困り入申候。然し前にも申上候通り、主上日々御出座、議定、參與被_二召出_一萬事被_二聞召_一候。私共罷出候所よりは、玉座は一聞半位、八疊之御間に中央に高き御疊二枚敷き御敷物、外に御たばこ盆のみにて御近習衆も一ト間隔て二三人も控え被_レ居候。私共は御居間之下下に罷出申候。議與一同に罷出候時も有_レ之、或は一人罷出候事も御座候。千餘年來絶て無_レ之御美事に御座候。御容貌は長が御かほ御色はあさ黒く被_レ爲_レ在御聲はおふきく仰せもすらりと被_レ爲_レ在候。御氣量を申上候へば十人並にも可_レ被_レ爲_レ在哉、唯々並々ならぬ御英相にて誠に非常之御方恐悅無限之至に奉_レ存候。」

時に不遇であり、遂には家祿も没收され、士席まで削られた身が、遂に廟堂に參劃して天顔に咫尺する光榮の身となつた。この書簡を觀ても小楠の尊皇心の深かつたことがわかる。後に小楠を目して尊皇心の足りないとして暗殺を企てたものもあつたが、六十歳の老軀を鞭つて廟堂の劇

務に勵精した小楠の勤皇愛國の精神を思ふべきである。

小楠は新政府に召された維新の人物のなかでは最年長者であり、またすでに天下に名を成した大立物として、識見も拔群であつた。新政府の顧問にしようといふ議まであつたが、性格上の非難もあつて、これは中止された。これについて、小楠の見識に敬服してゐた岩倉具視が、春獄の意見をもとめた時、春獄が、小楠の缺點として三ヶ條をあげたといふことである。それは、密事漏洩と酒癖と驕奢の三つである。前に引用した岩倉具視から長岡護美に與へた返書にも、三條云々の記事があるが、これもやはりその三條ではあるまいかと思はれる。小楠がかつて、長所と同時に短所を生かすことが眞の教育であると述べたことがあるやうに、この三つの短所も、非難して短所と云へば短所でもあるが、これと同時に人間小楠のよき一面をあらはしたものとも解される。そしてかかる小楠の短所は、彼をして時々、失敗せしめてはゐるが、それがために却つて同志を増し、人間小楠を人々の腦裏に忘れ得ないものとして刻印してゐるのである。

この缺點三條は、却つて小楠の人物の進歩的一面を語るものであり、小楠といふ人物の維新性と見られないこともない。およそ問題になるといふことは、從來の生活習慣や常識からは一歩進むことである。殊に徒に格式や形式に囚はれてゐた封建時代の舊生活に對して、何等意に介する

ところのない解放的な小楠の生活態度は、それだけで既に、「舊來の陋習を破り天地の公道に基づくべし」の明治維新の精神と無關係ではなかつた。新しい經濟理念による生活態度は、舊來の生活から見れば、驕奢と見られるのもそれである。もしかうした舊觀念のために、小楠に反感を持つものがあり、遂に彼の生命を奪はうとするに至つたとすれば、小楠こそ、維新生活の人柱であり國家發展のためにかくれたる犠牲と云はねばならない。

前掲の書簡などにもあるやうに、小楠は老體の上、上京前後から病氣に惱まされつつ劇務に勵精を續けたが、五月來になつて病狀がよくないので遂に缺勤せねばならなくなつた。しかも病勢は重くなるばかりで、一時は自他ともに再起覺束ないまになつた。そこで小楠は、小傳にもある通り、門弟を枕頭に呼んで遺表を口授筆記せしめてゐる。

この遺表は「第一條良心は道の本なり」にはじまり、人道、治亂、君徳、交際、の四ヶ條から成るもので、小楠學の神髓であると云はれてゐる。

しかし危まれた小楠の病氣も一時は小康を得てその年の九月頃は、出勤するやうになつた。九月十五日、米國にある二甥に送つた書面には、當時の病狀についてかう書いてある。

「拙者四年來少々痲疾相煩居候處、昨冬に至り大分つより、秋堤共療治いたし候へ共勝れ不

申、正月初高橋文貞呼び迎ひ同人より外治いたし速に奏功、近邊鐵砲うちにも参り候様に相成候間、三日出京參與被_レ仰付_レ殊之外多用朝より夜に入りすわり切り候間再發いたし、七八月頃迄は血便下りよ程六ヶ敷有_レ之候處、岩佐玄珪治療にて漸々甘快、昨今は十に八九分宜敷候故出勤いたし候。尤も酒も一切禁じ居專養生にうち懸り居候何に來月中には平癒可_レ致必ず_レ安心可_レ被_レ致候。」

しかし、やや小康を得たと思ふうち、重症の上に老體ではあり、間もなく病勢は悪化してまたも欠勤勝ちとなり、十二月初めにはいよいよ恢復も望み得ない状態となつたので、辭表提出を決心するに至つた。けれども年末となると、明治天皇はじめての東京行幸から還幸あらせられたので、いろいろと政務も忙しく、小楠も病苦を押して出勤し、殆ど一年中病氣と戦ひつつ、その年を終つたのである。

かくして病苦のうちに、明治二年、小楠六十一歳の新年を迎へた。この還歴の新年こそ、新政府が確立あれから第三年目にあり、天下の形勢はすでに定まり明治維新の建設事業はいよいよ進展すべき希望多き新年であり、小楠がますます活躍すべき時である。しかるに小楠には新年を迎へて間もなく病魔以上の受難が訪れた。

明治二年正月五日、小楠は、昨年十二月轉居したばかりの寺町通の寓居を出た。烏帽子、直垂の正装で太政官に出仕し、天顔を拜した後、午後二時過ぎ、迎への駕籠に乗つて寺町御門から御所を出て歸路についた。寺町御門から寺町通りを下れば、寓居までは僅に數町であるが、小楠の駕籠が寺町御門を出ると同時に、すでに兇徒につけ狙はれてゐた。そして遂に小楠は、白晝の都大路でこれらの兇徒のために暗殺されたのである。

小傳の作者は、

「然れども議論操行、一世潮流の外に出るを以て合するもの稀れにして生涯殆んど坎坷の間に在り、晩年家人子弟を戒めて曰く、吾、常に世と趣向を異にし他の指目する所となる、其免れて今日有るは蓋し天幸のみ、假令、吾、今日、非命に終るとも敢て或は復仇を謀る勿れと、言遂に讖を爲す」

と述べてゐるが、小楠にとつては、必ずしも思ひ設けぬ兇變ではなくて、かねてかかる最後は期してゐたところではあつた。これを換言すれば攘夷と開國よと天下の形勢はまつたく混沌のうちにあつて、學國一體の革新政治を斷行しようとするためには、常に身の危険を覺悟し一步門を出

れば常に刺客に取まかれてゐる程の覺悟がなくては、何事もなし得なかつた。また世の誤解を恐れてゐては斷乎たる實踐は不可能であつた。

しかし今や新政府もいよいよ成立して今日、かうした事件に遭遇するとは小楠にも豫測しなかつたであらう。

當時、新政府の威力はほとんど天下に及び、殊に京都などでは暗殺の風は後を絶つてゐた。小楠も昨年十一月、郷里に送つた手紙にも「此許彌以御靜安、市中別て取締り、一統之受方大によろしく、八月來は例の暗殺も一切無_レ之、誠に目出度至に御座候。武士は洛中に滿々いたし居候へ共けんくわと言ふもの絶て無_レ御座候。是等にて一體の成り行御承知可_レ被_レ成候」と書いた位である。殊にかうしたことは無頓着な小楠は、大名のやうな仰々しい供廻りを好まないいで、その日も駕籠脇に若黨一人、更に二十間ばかりも遅れて二人の護衛番がついてゐるといふだけの警戒であつた。警戒といつても、それぞれあまり目立たぬやう餘所ながら隨行するといふ程度であつた。

そして兇徒はまさに小楠のこの虚をついたのである。彼等は小楠の暗殺については、すでに數十名の徒黨を組んで昨年十二月中旬から周到な計畫を立ててゐたが、この日遂に決行したもので

ある。暗殺計畫の首魁は十津川郷士の上平主税であるが、その日の刺客は、上田立夫、土屋延雄、中井刀彌尾、前岡力雄、鹿島又之丞、柳田直藏の六人である。當時、小楠の手許には二十餘人の若者がゐたので少しく警戒を嚴にすれば、僅か六人の刺客に襲はれて暗殺されるやうなことはなかつたが、そこは神ならぬ身の油断であつた。

しかし、小楠は病軀ながらも、よく敢闘した。かつて士道忘却の譏を受けた小楠であるが、戦ふべき時は戦つた。はじめ上田の駕籠を目がけて發した一發の短銃を合圖に、忽ち一同が斬込んで來たので駕籠脚の亂れた時、賊は左右から駕籠に突込んで來た。けれども突込んで來る刃の下をくぐつて駕籠から飛出した小楠は、短刀を引抜いて群る賊徒を防いだのである。しかし、もはや老齡の上に一年あまりも病み疲れた身體で、血氣にはやる賊徒に取圍まれてはどうすることもできなかつた。忽ち賊のために數刀を浴せられて倒れたところを、鹿島又之丞が首級をあげたのである。すでに小楠の首級をあげると兇徒一同は、かねて計畫の通り、その首を三條大橋に梟すべく走り去つた。しかし途中、足の早い小楠の若黨に追ひすがられて、賊は首を投げすてて行衛をくりましたのである。あまりの突發事件のため白晝でありながら、その場では兇徒を一人も捕へることのできなかつたのは残念である。

小楠の遺骸は直ちに程近い寓居に移されたが、四人の従者も重傷を負うた。

この兇變はたちまち廟堂に達した。新政府最初の暗殺事件として、重臣達の驚きはもとより、その日小楠の寓居には畏くも勅使御差遣あらせられ、手負の従者にも四百兩の治療手當を賜はつた。それのみならず、明治天皇は、更に細川家に對して葬式料として三百兩を賜はり、細川家に於ても、聖旨に副ひ奉つて更に五十兩の葬儀手當を下さつた。かくて葬儀は正月七日、門人等によつて營まれ、洛東南禪寺山内の天授庵の墓地に埋葬された。

暗殺の動機については、その日夕刻、捕へられた刺客の一人柳田直藏の懐中にあつた斬奸狀によつて、決心は察知することができる、それには、

「横井平四郎、此者是迄の姦計不_レ遑_二枚擧_一候得共、姑舍_レ之、今般夷賊に同心し天主教を海内に蔓延せしめんとする邪教蔓延致し候節は皇國は外夷の有と相成候事顯然なり、併朝廷登庸の人を殺害には候事深く奉_二恐入_一候へ共、賣國の姦要路に塞り居候時は前條の次第に立至候故不_レ得_レ已加_二天誅_一者也。天下有志」

とある。しかし、これらは、いづれも小楠に對する皮相な誤解であつて、小楠が尊皇を大事とす

る維新の柱石であることは、その生涯の事實が實證してあますところはない。ただ小楠の生前の言動や性格のなかには、好んで敵を作ると云ふ風な傾向もあり、その思ひ切つた新時代的な進歩主義は、西洋盲信と觀られ易かつたのであらう。されば兇徒の處刑についても政府部内にも、異論があり、その死刑の執行されたのは、小楠死後、約二ケ年の後、明治三年十月であつた、死後にいたるまで問題を遺したところにも、人間小楠の一面がある。なほ、小楠の嗣子時雄をはじめ、一族門生のなかに、多くのキリスト教信者を出したのは、更に問題の後を引いた形であつた。

もとより暗殺の動機は、單純なものではなく、新政府に對する反動勢力となつてしまつた保守的な攘夷論者の中には、開明維新の時勢にとり殘されてただ不平不滿の徒となり、西洋風に改まつてゆく時代相に對して反感を抱きかかる洋風改革の中心人物を小楠と目ざしたものであつて、この十津川浪人一派の暗殺計畫の連累者は、數十人の多數に及んだ。しかしその動機の第一はいふまでもなく小楠を目して耶蘇教を國內に弘めんとする者と斷じた點である。即ち刺客の一人、上田立夫の口述書には、この事を主要動機として次に述べてゐる。

「平生尊攘の志を懷き居候に付近來洋學隆盛に被_レ行候を浩歎罷在候折柄、横井平四郎殿儀は

兼て博學多才之由に御座候處別て洋說に耽溺し、終に耶蘇教を弘張之志有_レ之哉に巷悅承り痛恨之至御座候。全體平四郎殿邪教主張被_レ致候ても、摺神家に於ては、容易に御同意被_レ爲_レ在間舖とは奉_レ存居候得共、近況之形勢觀破仕候に、胡服用用にて御築地内徘徊は兼て御大禁之處近來御許容相成、就ては武家之分多くは胡服用用甚敷は被_レ髮或は胡冠を用、赫々たる神明之國に生れながら如此醜體其心情更に不_レ解長歎息仕居候折柄、右平四郎殿博學多才之上若百方佞辯を以此上耶蘇教弘張之說を主張被_レ致候日には萬々一御許容可_レ被_レ爲_レ在も雖_レ計、然る時は、皇國萬世之御大害と苦心焦思寢食を忘れ少時も猶豫難_レ成、續怒胸中に漲り候に付、以_レ微臣之一死一易_レ皇國之大害一度赤心より至急に同志相謀候儀にて御座候。」

他の刺客の口述にもやはりこの點が、主要動機として述べられてゐるのである。しかしこれは全く彼等兇徒の誤解であるがかかる誤解を招いた點については、小楠も亦多少の責任がないわけではない。

小楠が西洋文明に對して關心の深かつたことは、今まで述べたところで明かである。彼は開國論者であり西洋醫學の普及に努力し、西洋の兵法を取り入れようとし、また二甥を米國に留學さ

せてゐるのみならず、耶蘇教についてもはやくから研究して居り、また外國から歸朝した耶蘇教
信者なども平氣で會談して西洋の知識の吸収につとめたものである。またまだ信念にまで熟し
てゐない思想でも、小楠は誰にでも談論する解放的な性癖もあつたので、皮相的に人物を批判す
るものには耶蘇教信者と同一視される危険もあつた。しかし小楠は決して耶蘇教の信者ではな
かつた。むしろあらゆる學問、宗教から學ぼうとする彼の實學精神が、禍したものであらう。彼が
耶蘇教に對していかなる態度をとつてゐたかは、明治元年九月、米國にある甥の左平太及び大平
に寄せた書簡の中にある次の言葉によつても知ることができる。

「薩州生鮫島誠藏、森金之允外國にては野田忠平、深井鐵太と改名、四年前イギリスに参り居
候中、同國人ヲリハントと云者に出會、ヲリハントより咄問候には、世界人情、唯々利害之欲
心に落入り一切天然の良心を消亡いたし有名の國程、此大弊甚しく有之候。必竟は耶蘇の教
其道を失ひ利害上にて諭し候故に人道滅却嘆げかわしき事なり。我等も全く耶蘇に落入居候處
アメリカ國エルハリスと云人より初て人道を承り悔悟いたし候。此のエルハリスも元は耶蘇教
之教師にて有之、二十四五歳にて天然之良心を合點いたし人倫の根本此に有之之事を眞知し是
より自家修養良心培養に必死にさしはまり誠に非常之人物當時世界に比類無之大賢人なり。

此人世界人道の滅却を嘆き専ら當時の耶蘇の邪教を開き候志なり。ヲリハント再び云我は役事
相斷エルハリスに隨從し修行せんと欲すとの咄し有之、薩の兩人も甚驚き遂にヲリハン
トと共にアメリカに渡りエルハリスに従學せり。エルハリスは退隱村居門人三十余人余有之
相共に耕して講學せり。其教たるや書を讀むを主とせず講論を貴ばず専ら良心を磨き私心を去
る實行を主として日夜修行間斷無之之譬ば靄然たる春風の室に入りたる心地せり。然しながら
私心を挾む人は一日も堪へがたく偶慕ひ來りし人も日あらず歸り去る者のみにて遂に其堂を窺
ふこと不能薩の兩人も初は中々堪がたかりしが、僅に接續の力を得て本來心術の學問に入り
たり。此人云世界總て邪教に落入り利害の私心に渾化せん實に人道の滅却なり。未だ邪教の入
らざる處は日本とアフリカ内何とか云國のみなり。日本は頼み有る國なれば此の盡力は十分致
したきことを薩人近頃歸り兩三度参り、此道の咄し合面白く大に根本上に心懸け非常の力行驚
き入たり。此のエルハリスの見識耶蘇の本意は良心を磨き人倫を明にするに在り、然るに後此
教を誤り如レ此の利害教と成り行き耶蘇の本意とは雲泥天地の相違と云ふ事なり。

此段大略申遣候。扱々感心之人物不レ及ながら拙者存念と符節を合せたり。然し道の入處等は
大に相違すれども良心を磨き人倫を明にする本意に至りては何の異論か有らん。實に此の利欲

世界に頼む可きは此人物一人と存するなり。都合に因りては必ず尋ね訪ひ可被_レ申、重々存候事。」

この書簡のなかに小楠が「我等も全く耶蘇に落入居候處……初て人道を承り悔悟いたし候」と書いてある通り邪教の宣傳などは思ひかけぬ事であるが、また一面には嫌疑を受ける點もないでもない。

なほ、耶蘇教及び西洋文明に對する小楠の態度を明かにするものとして、注目すべきは、「沼山對話」である。これは井上毅が肥後藩の時習館居寮生であつた時、沼山津に小楠を訪ねて問答したものを自ら筆記したものである。その問答中、耶蘇教に關する部分を、長文ながら次に掲げてみよう。

「扱無_レ序様に候え共是も格物の一端と存候えば御尋申候。只今海外は大抵耶蘇教を奉じ候と申事、誠に候哉。

八分通は耶蘇教を奉じ候。

耶蘇教の義は倫理を主として人に善を勧むる者に候哉、又専ら利を主として教を立候ものに候

哉。

耶蘇教も亦人に善を勧め候を主といたし候。

扱耶蘇教の淵源を尋ね候えば耶蘇は本西天竺の地に生れ佛の後に起り候て其教を立る處を見るに全く佛の一種に相違なく、然して西洋に流漸致候。扱其處説を見候に耶蘇の説佛に比ぶれば一入深玄に候。全躰耶蘇にも八派ほど分れ候て、其内西教と申すは尤も輓近に起り、只今、英墨等の國に専ら流行致し、或は漢土に参り著述など致候ポイレン等も皆西教を奉候ものに有_レ之候。右ポイレンが説に其一を擧て申候はば唐にて心、耳、目、鼻、口を五管と稱すること主従を渾説したものにして誤なり、耳、目、鼻、口は皆皮膚にて其理は心に備へたれば心は一身の主にしては膚の一管一職と並べ稱ふべきにあらずなど申す程なること重疊尤の説にて、佛説には此等の精密なる處は無_レ之候。

其害を申候えば佛と耶蘇とは何れが甚しく候哉。

佛は倫理を廢し、耶蘇は倫理を立候えば、佛の害甚しく候。扱此に一つの辯あり、我孔孟の道は堯舜三代の道經を祖述いたされ候ものにて、堯舜三代は位に居て天下を治められし故其道正大にて天に繼ぎ教を立てられたり。孔孟は又天下正大の理を以て教を後世に傳へられ候。佛と

耶蘇との如きは元來下位に在て私に愚夫愚婦を教化するの心より起りたる故に天堂地獄などの説をなし、方便を設けて人々の曉り易き様にいたしたるものに候。

然ば聖人と佛耶蘇と易_レ地皆然らんか。

左には非候。聖人の道は中々人に教解する位のこと無_レ之候。

佛の害耶蘇に比べ候えは倫理を敗ること甚しく候義尤のことに被_レ存候。扱佛の中にも一向宗は夫婦父子御座候て倫理に近く候は如何にて候哉。

耶蘇は一向宗に類して今一層深きものと被_レ存候。

一向宗は倫理に近く候得共、君臣は七世の契佛は高代の契など申唱候て不慮の變をも起し候えは其政治を害し候事は禪宗、天台などよりも甚しく可_レ有_レ之被_レ存候。

強ち左様なるものにて無_レ之候。併し一つの慮るべきもの御座候。佛日本に入りし以來教深く民心に濟みたり。今耶蘇教と姑く其説の是非を不_レ論只耶蘇若しも日本に入込候えは必ず佛との宗旨争を起し乍に亂を生じ生靈塗炭と相成可_レ申、此患顯然たることにて何分にも耶蘇教を入れ込候ては相成まじく被_レ存候。全躰宗旨亂と申すこと成程不慮の變をも起し至極恐るべきものに候。日本のなども尤害あるものにて、近來、水戸、長州の滅亡を取候にて知れ候。

其耶蘇を防ぎ候には何の術を以てし候哉。外に術も有_レ之間敷、只本を正して民心を堅く仕候えは耶蘇には染み申間敷候。

教法のこと宗旨愈邪なるほど愈愚民を惑はし易く被_レ存候。譬へば今論語を講説致爲_レ聽候よりも坊主の説法を聽せ候が信仰仕候。又坊主の説法にして禪宗よりも法花宗、一向宗などを信仰致候。是愚民の通情にて候。然ば縦い我に本を正し候とも夷人と交通致候えは耶蘇は必ず入込可_レ申被_レ存候。

近來夷人も開け候て宗旨亂れは甚だ手懲いたし、強て人に我宗旨を勸め候こと嚴禁いたし居候。是は追々宗旨の争より大亂に至り候事有_レ之候故にて候。羅馬教とてゼルマニヤに出候教師即「キリシタン」にて候。今イスパニヤ、ポルトガルなど専ら此教を奉じ候が西教よりも強て此の教を敗り候など仕らず候。之にて相分申候。されば宗門入込の氣遣は先無_レ之候。

道は必ず一に歸する譯の物にて候えは教旨も彼此必消長を相爲するものにて有_レ之べく候。縦い互に異同の争不_レ仕候共又互に勸説不_レ致候共、後には彼我に化し候が我彼に變候が何様にも必傳染可_レ仕、是れ自然の勢にて候と被_レ存候。然ば何を以て彼此の分限を明白に仕候て向後の傳染を防ぎ可_レ申候哉。

是此方の法則にあることに候。先年ハルリス談判の時分にも此方より教師は此の地に來留致こと禁止たるべしと申し放しに相成候えばハルリス申分に教師は宗門の趣意にて教法を廣め候を主と致し候えば私共より教師の來留を禁じ候こと相成兼候是は御地にての法制にて宗門傳染の愚は有レ之間敷候と申すこと尤の申分と被レ存候。

耶蘇教に聖人の道に合したる義は無レ之候哉。

昔の耶蘇教は只だ愚民を教解する迄にて至て淺近なるものに候。然るに近來に至て西洋に致し候ても其士夫たるものは強ちに耶蘇を信仰するに無レ之、別に一種論窮理の學を發明致候て是を耶蘇の教に附益致し候。其經綸窮理の學民日用を利すること甚だ廣大にて、先は聖人の作用利世安民の事業二典三謨にて粗見得可_レ致候。皇陶謨に六府三事允又と有_レ之、六府は水火木金土穀の六物を指候て民生利用の財用不可_レ缺者なり。聖人上に在て民生日用の世話をいたされ右の六府を又めて其用を盡し、物産を仕立て器用を造作し許大の生道を建立せられたり。是實に聖人代天の大作用なるに、朱子之を知らずして五行の氣と穀とを合して六府とすと説けるは大なる誤にて候。又一篇の禹貢を讀候に禹の水利を順導いたされ候功業西洋人も是を見て甚だ其作用の廣大なるを嘆感すと云。又禹貢は至て簡古の文跡なれども九州の物産をば逐一記

載して、其土宜を察し以て有無交換の法制基本を立てられたり。先是にて聖人の事業を知べく候。其他舟楫交易の道理易にも見えたれば乃聖人の始められしことに候。大凡民は農を以て本とすと雖ども、農業一端のみにて民用百物を仕立つる者なき時は生活の道不足致候。此に擁する所の火鉢を送る者もあるべく又握る處の煙管を作るものもあるべし、室中皆他人の作る處にて皆交易を以て我用をなしえたり。されば民用は交易ならざれば不_レ立と可_レ知。今某浪人にて此に住居し候に若し熊本に出て日雇を事とし貧窮を救はんと思はば隨分日雇錢をも得べし。又妻女等にしても女工の賃を得んと思はば熊本ならば必ず木綿賃引等を頼むものもあるべくして隨分とも飢渴を防ぐべし。然るものは熊本は都會にて融通交易の便利を得たる故に候。今此に熊本を去ること僅に二里にして某縦い日雇をなさんとしても誰有て雇ふものもなく、又妻女に賃引たのむものもなし。誠に迷惑なる境界也。是畢竟融通の道を得ざるが故に候。況や更に五七里の遠郷にしてさぞかし難澁の次第なるべし。是にて交通融通の民生に便なること知られ候。其交易融通の道日本全國に取り法制を得ざる故に今日日本如此の貧國となりたり。今日日本三千五百萬の生靈其衣_レ帛食_レ肉の族は五六萬に過べからず、其余は大抵凍餒の民なるべし。是畢竟鎖國の見にて一即一國各自己の使利のみを計り正大の融通行はれざれば財貨のさばき口自

由ならず、さばき自由ならざる故に國々もろもろの物産皆滞りて坐ながら陳腐するに至る。物産滞りて售らざれば游民工職につくこと不_レ叶なすべき手業もなく無_レ餘儀_一手を空して日を送ること憐むべき次第なり。全躰百人の民にあらば其七十人は農業を事とすべし、其余卅人は老幼或は貧民にて農業をなすこと叶はず、徒に余力を空し全き游民となることなり。今日本全國十の三は游民なれば如_レ此の貧弱國となりたること誠に道理なり。是畢竟地々の物産諸物を仕立べし。物産を仕立つるには物のさばき口を流通させて餘計の物産涌出る様に出來すとも少も滞ることなき様にすべし。右の法制を立つるは交易の道を開くこと畢竟の便利なり。交易の道開けば何一つ余るものなく自由に捌け可_レ申候。今洋人の所爲をみるに火輪船、蒸氣車、傳言器、水車木綿等を始として民生日用の便利のこと皆講究造作して其至極を究め、近來又紅海の海峡を掘りぬぎ海路とする等のこと誠に莫大の私あり。其上に萬國に交通して交易の利を廣くする故に渠等國富兵強民用の利厚くして租稅等も至て寛なることを得たり。之其經論の功業聖人の作用を得たるものと可_レ申候。

經論の文字は已に聖人利物の大業にて仁の功用とも可_レ申候をば、洋人も仁の功業を得候哉。誠に仁の功用を得たりとも申され候。大凡仁の用は利を以て人に及ぼすにあることに候。譬へ

ば子たるものの孝道は十分心を親の身に懸けて、只々親の心を安んずる様に致すことに候。人君愛民の道は是に専ら民を氣に付けて、民の便利をはかり世話を致す事に候。天日の恩と申ても専ら萬物を煖め養ふて是を育つるにあることに候。是皆已を捨て人を利することなり。故に利の字已に私するときは不義の名たり、是を以て人を利するときは仁の用たり。仁の躰は固より已に在て、仁の用は外物にあることに候。

洋人已に仁の用を得候て人を利するの道を施し候えば、追々には和蘭は咬嚼吧を其土の國王に還し、英吉利は印度を其舊王に還して各其所を得る様に可_レ仕、必定左様可_レ有_レ之候はん乎。

何分左様には參兼候。是必竟各國に於て各の割據見の氣習を抱き、自利するの心躰にて至誠惻怛の根元無_レ之候故何分天を以つて心として至公至平の天理に法り候こと不_レ能ものに候。此は是非もなきものに候。管仲が仁と申すも畢竟は此根元なき故霸術と相成申候。乍_レ去渠等追々の世變を瞭視する處有て不仁不義の終に患を招くに至ることを知て甚しき暴虐はなさざるのみならず、近來は又人の國を奪取など申すことは勢不_レ行ことと存決して不_レ仕候。扱印度は膏腴の地にて交易の便利至て宜しく甚だ愛惜致し、頗る寛政を行ひ租稅なども至て薄く取立て其民

心を懐て候。是はアメリカの事に手懸したる者とみえ候。

然ば洋人の經綸は有末而無本ものに候はんか。

左様にて候。其見る處元來利害上より出でたるものにて、皆向ふ測とみえ候。

洋人の萬國一躰四海兄弟と申唱へ候は天理に叶候哉。

是は全躰を申したるものにて、其實を申せば親疎の差別あるべきことにて、然るに華夷彼此の差別なく皆同じ人類にて候えば互に交通致交易の大利を通じ候が今日自然の理勢と被_レ存候。

萬國一躰四海兄弟の理は必ずとも互に交通致候て相顯はれ候乎。今城下の士衆より小子輩末々の者に至る迄同じ一國の人に候えば一致一和に無_レ之候ては雖_レ叶、然處貴賤上下となく知る不_レ知となく必途中にても目禮挨拶等致互に親み合不_レ申候は一致一和とは被_レ申がたく候乎。

夫は勢不_レ行ものに候。今日宇内の勢火輪船出來、天涯如此比隣に相成候えば互に交通可_レ致の形勢に相成候。今日に至り獨立鎖國の舊見を主張するは天理に悖候ことに候。

西洋にも航海交易を起し候は三百年來のことと見え候が、其以前は萬國皆天理に悖り候か。古今勢異候。勢に隨ひ理亦不_レ同候。理と勢とはいつも相因て離れざる者に候。

今日の勢有ばこそ今日の理御座候乎。

左様にて候。

物産交易の法制日本一國にて國々互に融通致候而已に事足り不_レ申候哉。然ば必しも夷人と交通不_レ致候共宜しかるべくと被_レ存候。如何にて候哉。

今日の勢宇内萬國一同交通致し候えば今日日本一國鎖國割據の舊習を主張致候えば乍に萬國を敵に引受眼前滅亡の禍を招くべく、長州の一件にて被_レ知候。さしより江戸御城下を始め渠等に燒き立てられ人民慘怛の禍を極むべく候。

渠等は已に萬國を一躰に視候ほどの公平の心に候へば、今日日本現在夷人應接のことより内亂を引起し候處を以て是非もなき次第故謝絶に及候はば、何故日本を敵とし致し候て日本滅亡の禍に陥るべき哉。

渠等申唱へ候議論皆枝葉末流に付て精微に研究する迄にて、至誠惻怛より發出致候者とは相違いたし候。其本處は畢竟利害より出候て暴虐無理を振舞候へは終に其害を受くべきことを察知致し、只今に至りては萬國皆人の國を奪取などのことは不_レ仕候。七分の合戦より三分の交易は莫大の利にて候えば今に謝絶致候はゞ日本人心つまり交易の方に安心不仕と見込居候ものと

みえ候。渠等申立候議論は甚だ精密なる物にて丁度易を見たる様の物に候。易は吉凶悔吝を以て教を示し候。渠等が見る處も本利害より出候え共、向ふ捌は甚だ根強きものに候。

英より初發兵艦を以て強て通商を求め候は是又無理なることにては無く候哉。

イギリスはイギリスの割據見、ロシアはロシアの割據見にて各の一國々々の議論主張致候故追々惨怛の戦争引起し候。已に近年兩國釁を構え五年か十年内に大亂に至り可申、如何成行可申可、甚だ痛ましく被_レ存候。全躰割據見と申す者免れがたきものにて、後世は小にして一官一職の割據見、大にしては國々の割據見、皆免れざることに候。眞實公平の心にて天理を法り、此割據見を抜け候は近世にてはアメリカワシントン、一人なるべし。ワシントンのことは諸書に見え候通國を賢に譲り宇内の戦争を見るなど三個條の國是を立て言行相違なく是を事實に踐行ひ、一つも指摘すべきことは無_レ之候。然るにアメリカも今日に至りては已に南北の戦争に相成候てワシントンの遺意は早失ひ申候。何様渠等如何なる心意を抱き候にも目前申立候稜々は皆道理をふまへ候えば我應ずる處のものも道理を以てするより外は無_レ之、縦い彼は二重三重に城府を構へ參り候共我は至誠惻怛を以て交るべきことに候えば世界に透らぬ處はなかるべく、所謂煙管一本にて事足ると申處に候。

西洋前代の形勢は如何にて候哉。

西洋の前代は總て商買を以て國を立て候ものとみえ候。近來に至り許大の經綸を發明したり。船も本支那作りにて、蒸氣船なりしは近百年のことなり。蒸氣船の軍艦になりたるは抑も三十年來のことにて、各國如_レ是の富強になりたるは曾て前代よりの遺業にあらず候。大抵ポナペルテの一亂より諸洲甚だ手懲して共に會盟を結び、爾後駭々と振立今日の強勢とはなりたる者とみえ候。日本にしても今一新法制を設け規模を立候はば乍に海外を威朋し諸國の暴横なるをば制壓するに足るに至るべく候。若し又鎖國の舊習を固執せば乍に莫大の禍を招くべし。二つの物利害現然たることなるに、拘滯にして通ぜざるは誠に昏愚の至りに候はずや。

今日日本の法制を一變仕候はば人心居合兼ね、現在の長州、水戸の如く必内亂を引起すべく候。是は何を以て治め候哉。

不_レ得_レ止_レことに候。古より聖人皆干戈を以て世を始められ候。黃帝より下成湯、文武の聖徳と雖も皆師を用ひて天下を混一致され候。兵力は徳を輔くるものにて長州の一條にて相知れ候。夷人來り候えば乍に膝を屈し候が今日日本勢推寄せ候とも容易には屈服致すまじく、畢竟兵力の強弱にあることに候。全躰今日の人情は開國と鎖國と因循の三通に相分れ候。今日の因循なり

に打過候はばつまり衰亡を招くべく候。

其開國の内にも三通有之様存候。國本を正大にして神聖の道を宇内に推廣可申との説に御座候。

神聖之道とは被_レ申まじく、道は天地自然の道にて乃我胸臆中に具え候處の仁の一字にて候。

人々此の仁の一字に氣を付け候へば乃自然の道にて候。□□の害は甚しきことにて、水戸、長州など□□を奉じ候族君父に向ひ弓を引候埒に相成候。

一つは自ら強ふして宇内に横行するに足るに至らんとには水軍を始め航海を開くべしと申説に御座候。

一つは彼れが四海兄弟の説に同じて、胸臆を開て彼と一躰の交易の利を通すべしと申す説に御座候。

横行と申すこと已に公共の天理にあらず候。所詮宇内に乗出すには公共の天理を以て彼等が紛亂をも解くと申丈の規模無_レ之候ては相成開放、徒に威力を張るの見に出でなば從來禍患を招くに至るべく候。」

これによつて、單に耶蘇教に對する態度のみならず、一般に西洋文明に對する小楠の態度を知ることが出来る。「耶蘇教若しも日本に入込候えば必ず佛との宗旨争を起し乍に亂を生じ生靈塗炭と相成可_レ申、此患顯然たることにて何方にも耶蘇教を入れ込候ては相成まじく被_レ存候」と明言してゐる。また西洋文明についても、「洋人の經綸は有_レ末而無_レ本ものに候はんか」の問に對して「左様にて候。其見る處元來皆利害上より出でたるものにて、皆向ふ捌とみえ候」と斷じてゐる。それを認めた上での開國論である。「日本にしても今一新法制を設け規模を立候はば乍に海外を威服し諸國の暴横なるをば制壓するに足るべく候」とは、小楠の開國論の歸結である。

しかしながら、これを保守的な攘夷論者から見れば、小楠の思想のなかには、耶蘇教的に見えたり、反日本的に見えたりする點もあつたであらう。兎徒はこの紙一重の觀點を誤解したものである。

しかしながら、楠公父子の高風を慕つて「小楠」と稱し、平重盛や北畠親房を崇拜した小楠である。また畏くも明治天皇の侍講となり、「幼學綱要」の著者として、教育勅語の立案にも當り、樞密顧問官として全生涯を皇國に捧げた元田永孚の人格を啓ひ育てた小楠である。その元田永孚が「先生は道學中の俊傑也」といひ、「帝者の師」と尊敬してゐる。またかの五箇條御誓文

の立案者たる由利公正は「先生 至尊を敬慕する心止むときなく或日病甚しく朝を辭す、晨に起て口嗽遙に、至尊を拜す、其至情切なるの狀狂するが如きものあり」と評してゐる。こそ、不滅の證言となるであらう。

後に、大正七年小楠五十年祭に際しては、大正天皇より御下賜金を賜はり、昭和三年十一月、今上陛下御即位の大典にあたり、正三位を贈られるの光榮に浴した。かくして、小楠もまた崇拜してゐた楠公父子とともに、皇國史上の忠臣として千載にその名を止めたのである。今や横井小楠の尊皇の大精神は日月のやうに明かになつた。

けれども西郷南洲、勝海舟とともに明治維新の風雲のなかに傑出した三大家物とも稱さるべきわが横井小楠は、やはり不遇の偉人であつた。勝海舟が、後に述懐して、「俺は今まで天下に恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲とだ」と云つたといふことであるが、今日に於て、南洲の名はあまりにも高いが、それに比較しては小楠の名を知るものは多いとは云はれない。また開國日本の兩眼球と云はれた東の佐久間象山と比較しても、西の横井小楠が高名であるとは云はれない。したがつて眞の小楠精神を知るものの、少いのも當然である。しかし、この不遇の偉人の眞精神は、今日以後、大東亞の新しい世界建設の日にいよいよその眞價を發揮するであらう。

就中、教育者としての小楠こそ、世界的日本人の教育のために、教育史上に特異の光芒を放つものである。

第十一章 教育観

横井小楠は、明治維新の前後に傑出した人材のなかでは、或は不遇の偉人であつたかも知れない。従つて彼をもつて大政治家とも、大經濟家とも、大兵學者とも、また大學者とも云ひ得ないであらう。もとより彼は學問は東西古今に通じ、治國平天下を理想とする政治家であつた。しかしながら、彼ののこした業績の上から考へると、大教育家と呼ぶことが、最も適當であるやうに考へられる。彼は大政治家ではなくて、政治教育家であり、大經濟家ではなくて、大經濟教育家であつた。小楠が、自ら「吾は執政の人に非ざるなり」と云つてゐるやうに、實際の政治家ではなくて政治理論家であり立案者であつた。また産業經濟に於ても、自らこれを實現するよりは、例へば由利公正のやうな門生をして實踐せしめる教育家であり、經濟の理想家であつた。武術の實際にも通じてはゐたが、やはり武の理論家であり、彼はいつも武藝には弓馬や刀槍を執る必要

はない魂を練るのが武であるといつてゐた。

どの方面から考へても、小楠こそ、理想に近い教育家であつた。この意味では日本教育史のなかには、陽明學派の教育とか朱子學派の教育とかの分類に拘泥して、横井小楠の教育を加へてないものが多いのは遺憾である。幕末の教育家のなかで最も進歩的な教育家といふも過言ではあるまい。

また徳川幕府の滅亡から明治維新までの一大轉換期に於ける開國日本の旋轉軸を動かしたのも、横井小楠であるといふこともできる。彼の思想は、一方には松平春嶽を通じて幕府を反省自肅せしめ、參勤交代の廢止、將軍上洛などの實現となり、勝安房を通じて學國一致の革新運動たらしめまた、坂本龍馬を通じて薩長同盟、大政奉還となり、直接門下の由利公正を通じて五ヶ條の御誓文、太政官令、外國交易などの方面にまで發展してゐる。明治維新の底には、かくもひろく小楠精神が流れてゐるのである。さうして人をしてなさしめるが、教育家の本質であるとすれば、横井小楠はまさしく、明治維新の人材の教育家であつた。

明治維新の根本精神が、いかに小楠精神と關係があるかは、小楠門下の由利公正が、作つた五箇條御誓文の原案ともいふべき次の由利案を一讀してもわかるであらう。

一、庶民志を遂げ人心をして倦まざらしむるを欲す。

一、士民心を一にして盛に經綸を行ふを要す。

一、智識を世界に求め廣く皇基を振起すべし。

一、貢士期限を以て賢才に護るべし。

一、萬機公論に決し私に論するなかれ。

この由利案が五つの箇條から成つてゐることや、その進取的な思想や語調に至るまで、小楠の慣用に類したところが多いといふのは、既に學界の定論となつてゐる。されば、明治新政の根本精神となつた五箇條の御誓文のなかには、新政府の顧問客であつた小楠の理想が、こめられてゐる。この一事をもつてしても、明治精神から大正昭和の現代まで、進動してきた日本文化の底には、わが小楠の精神がはたらいてゐることを認めなければならぬ。小楠こそ、新しい日本文化の父であり、發展日本の教育者である。

殊に、小楠の門下生のなかから、いかに、多くの人材の出したことであらう。文豪徳富蘇峰や蘆花の父、徳富萬熊をはじめ、教育家竹崎順子や小楠夫人せつ子の兄にあたる矢島源助、竹崎律次郎、徳富一敬などの直弟子があり、その他、三岡八郎(由利公正)や元田永孚、松平主馬、青山

貞、堤正誼など、人材雲の如く輩出してゐる。由利と元田の二人だけをもつてしても、小楠の大教育家たるの實績は動かない。もつとも元田は門下生といふよりは、小楠の後進であり學友でもあつたが、この明治の功臣元田を玉成せしめたものは、小楠であつた。元田は「先生の余に於ける其少しく善あれば口を極めて稱揚し、足らざる所あれば誹斥して置かず、然ども又其意に適する所あれば快然として光風霽月の如し」と小楠の教育を述懐してゐる。元田は小楠の死後、その理想を小楠に變つて實現した新しき小楠ともいふべきである。徳富蘇峰が元田を評して「小楠を精製して漉きかへしたのが元田であり、小楠には少し槽がある」と云つたのは、適評であらう。また由利公正が師の小楠の繼承者として新政府にその理想を實現したことは、既にその一端を説いた。教育が國家有用の人材を啓培することを第一義とする以上、小楠の教育は吉田松陰の教育とともに、明治維新史の上に、特筆さるべきものである。

もとより小楠の教育のかかる歴史的な成功は、そこにまた特筆すべき理由がなければならぬ。教育は偶然の現象ではなく、意圖的、計畫的な人格活動であるからである。「教育は人なり」といはれる所以もそこにある。小楠は生前はもとより死後までも毀譽褒貶のまぢまぢな問題の人物であつたが、教育家としては優れた素質があり、教育家的な性格であつた。

その第一の要素は、いふまでもなく小楠その人の人間としての魅力である。教育的魅力であり指導者的な持味である。人間磁石のやうに、人を引きつけ導くところの牽引力があつた。それについてはすでに前章に於て觸れて置いた通りである。

この人間としてのたくまざる牽引力こそ、教育家としての第一要素であり、世の教育の成功者は悉くその要素を持つてゐる。

山崎博士が、「一たび彼に接したものは忽ちに其の超絶した志操に打たれ、其の洒然たる胸裡に引付けられ、只一席の會見で能く頑も廉も懦も立ち、遂には手の舞ひ足の踏む所を知らざるに至つた」と述べてゐるのは、その大教育家としての性格を表現したものである。小傳に曰く、「人に接するに眇域を設けず、疇昔曾て我を敵視する者と雖も來れば則ち釋然たり、音吐朗々として談論風を生ず、人を教るや繩墨に流れず、燕談閑話の中能く其の情を盡くし其蘊を吐かしめ、其悉くさざる所を導き足らざる所を釋せるの端緒を得せしむ。其怒るときは霹靂一聲心膽をして冷やかならしむると雖も一霎過て青天を瞻るが如く一毫も迹を留めず、又事を他に爲さしむるや人をして其指示に出るを忘れ其自ら思慮し得たる所を爲すが如きの感有らしむ」と。ここに教育家としての小楠の限らない魅力がある。もとより高邁な識見がこれに伴はねばならぬことはいふま

でもないが、この人間としての指導的牽引力は、小楠の教育を成功せしめた最大動因であらうと思はれる。

かかる教育家的性格は、今日のやうに單に師範學校その他の教育養成機關をもつて養成し得るやうな單純なものではなく、むしろ天性に近い。小楠の詩に、

神知靈覺 湧いて泉の如し

作爲を用ゐず 自然に付す

前世當世、更に後世

三世を貫通して皇天に對す

と、その信仰を歌つてゐるが、この中の「作爲を用ゐず、自然に付す」はたしかに小楠自身の生活態度であつた。教へようとするから他が教へられるものではない。教へるといふ作爲は却つて、教育力を減殺することさへある。去るものは追はず、來るものは拒まず。「人に接するに畦域を設けず」何事も天にまかせて人爲をとらなかつた。子弟と對して何事も作爲の態度がなく、無邪氣に打解けて語るとき、そこには自然に天の作用が働いて動かぬ教育ができる。人を導き教

へても、それを教へた導いたと自覺してゐる間は、まだ眞に教導に徹底した境地ではない。教へた人自身が他を教へたことを忘れて自ら教へること自身によるこびを感じ、教へられたものも他から教へられたことの氣のつかぬやうな境地こそ、眞の教育境である。教へが成立つのはまつたく天の作用であり、「作爲を用ゐず、自然に付す」である。

したがつて眞の教育境に於ては、教育は、教育者にも被教育者にもよろこびであり満足であり法悦であつて、決して義務的なものではない。小楠の教育は、小楠自身の人格のおのづからなる發現であり、たくまざる表現である。だから「怒る時は霹靂一聲心膽をして冷やかならしむると雖も一雲雨過て青天を瞻るが如く一毫も迹を留めず」とあるやうに、何ものも隠すところはなかつた。これがため、小楠は時と所とを問はず、思ふところをすばすと云つてのけるために、常に誤解されることがあり、短所の一つに「密事漏洩」をあげられたりした。小楠は、「吾平生人に異なることなし、只人にして言ふ可からざるなし」といふ司馬溫公の言葉を愛用したといふことであるが、小楠もまた他人の前で、處かまはずまだあまり確信に到達しないままの考へをも、口にしたりする性癖があつた。當時の鹿爪らしく形式ばつた封建時代では、輕薄と云はれ不謹慎と見られたるのも當然である。

しかし、これは一面、小楠の光風霽月の心の姿であり、いはば誰にでも打とけられる性格である。そしてこれがまた教育者としての成功の一因をなしてゐる。教育者とは、すでに天下の定説となり常識化された結論ばかりを、鹿爪らしく傳授するだけが能ではない。常に問題を提供して人をして考へしめ發奮せしめ、問題を提供すればよいのである。それも作爲ではなく自然に問題の前に立たせるためには、かうした解放的な態度がのぞましい。

また、小楠は極度に繁文縟禮を排して眞實を求めた。これがために無内容の寡黙や虚偽の慎重を無視したのである。小楠には物にかまはぬいろいろな話がある。或宴會の席で、力の強い大男が議論の末、この小男めとばかりに小楠につかみかかつて來ると、小楠はさつと身體を低くして敵の股下にもぐり込み、その罌丸を驚掴みにしたため、一舉にしてこの強敵を屈服せしめたといふことである。機敏でもあるが、格式にこだはらぬ行動である。

すべて小楠は、「ありのまま」で生き抜いた。荒削のままの人生で押通した。そこがまた教育者らしからぬ教育者として新味があり、青年への限りない魅力となつたのであらう。

天自然の態度には、無理がなかつた。無理に教へたり、無理に威嚴をとつたりする必要はなかつた。ありのままを天としたのである。

小楠は變節改論をもつて難ぜられたが、何事にも自然を旨とし無理をしない小楠は、思想の歩みについても無理はしなかつた。世間では小楠の變節を非難するが、小楠の最もよき理解者であつた勝海舟は、却てそのことを小楠の長所として敬服してゐる。

勝海舟の語るところに依れば、小楠はよく人に對して意見を述べる時、「今日はかう思ふけれども明日になつてから違ふかも知れない」と云つたといふので「これは尋常の物尺ではかれぬ大人物だ」と感心してゐる。海舟に従へば世の中は時々刻々に變化するもので萬事を一定の小理窟で處することはできない。世間は生きてゐるが理窟は死んでゐる。天下のことは豫測できないもので、方針を定めても何もできるものではないといふのである。

「學を爲すには須く今是にして昨非なるを覺るべし。日に改まり月に化する即ち是れ長進」とは小楠の信條であつた。

心にはすでに自己の思想の變すべきを知らながら、世間の非難に脅れて、無理をして舊説を固持してゐるのが、何もほめたことではあるまい。小楠の思想の進歩は一日も停滯することなく、時勢の速度よりも、常に一步を先んじて進んだのである。それが小楠の長所でもあり、またこれが教育家として成功した所以である。およそ固定した世界觀や人生觀を、無理をして強制的に門

生に押しつけるのが、眞の教育ではなかつた。たとへば小楠といふ指導者は、富士に登る門下生達を、それぞれ無理のない速度で、それぞれの歩速に應じて進動させるに妙を得た先達であつた。これを無理に一定の速度にして強引に登山させるといふのではなく、山頂といふ天を目ざして登るといふことは、同じであるが。それぞれ自身の力量にふさはしいよろこびの速度をもつて進んでゆくのである。

今日はいかう信ずるが、明日はどう變るかも知れないといふやうな教育では、さぞかし門下生はたよらない教師であると思ふかも知れないが、そこに眞實があり、ありのままの姿があり、そして同行の共感が湧くのである。

變はると云ふのは、作爲で變へるのではなく、自然に變はるのである。これを教育の場合に考へても、被教育者を、無理に變へるのではなく、天が變へる、即ち自然に變はるのを待つ氣長さがあつた。教育の眞の進歩とは、強いて進ませることではなく、自然に付いて進むこと、即ち眞實に進むことである。小楠の言葉に「何事もく、此節參らば來年、來年參らねば其先、其先參らねば一生の中、一生の中參らねば死後の先に參り候へば宜敷御座候。死して聊かも助長仕り不申候。又少しも退屈不仕誠心を盡し候が人道と奉存候」とあるが、これがまた彼の天を信

ずる悠々たる心境である。

ここにいふ「助長」とは、「孟子」の「助長する勿れ」の助長であつて、世間では、この助長を教育とみなしてゐるものが少くない。しかし、小楠は常に助長の實を説いた。あまりに效を急いで作爲をもつて引伸ばすのが助長である。形式的な助長の教育は、小楠の極力排するところである。

教育家としての小楠の長所は、次に人を視るの明があつたことである。透徹した人物鑑定の眼識があつた。これについては、西郷南洲は、坂元純熙に命じて各地の政況を巡視させた時、坂元に與へた書面のなかで、次のやうに小楠の人物鑑識力を推稱してゐる。

「熊本藩横井平四郎壯年之砌諸國遊歴いたし、國々人物を尋廻、人材と彼等が目し候人に其後名を擧げざる者は無之加州之長沼某と申者只一人其名顯はれざるよしに御座候。夫故皆人横井の識鑑之高きを稱し候よしに御座候。」

人物を鑑識することは、教育家として重要な資格である。従つて當時の人物は、人と會見することを、重大視して、人間修業の機會とした。小楠もまた他人と會見する時は、その人の意見を

識るために努めた。

「小生所見は人と話合致候には向方の意思を酌取申儀第一義と存申候。大略は自身の存念斗を主張致候て、向方之意は一向に體し不_レ申、是話合落兼申源本にて御座候と存候。又云人と話合申候には、向方の思寄不_レ申處を二稜斗り乘懸け不_レ申候ては乗落しは出來不_レ申儀と存候。詩云鳥飛魚躍」

これは小楠が元田東野に與へた文章であるが、人との話合について、如何に周到の注意を拂つたかは、この一文でも推察される。世に生きることは他人の心を讀むことであり、深く生きるとは他人の心を深く讀むことである。そして深く他人の心を讀むことは深く他人と交はることを意味しまた深く他人を知ることである。小楠が人を知るの眼力は、かかる不斷の用意によつて養はれたもので、決して偶然ではない。

人を知ることが、教育家にとつていかに重要性あるかはいふまでもない。知ることは、教へることのはじめである。理解なき教育は決して成功しない。そして、人は良師に教へられたいばかりでなく、良師に自分を知られたいものであり、この知られたさこそ、教育の出發點である。知

られることは教へられることでもある。一つの能力を認められたために、いかに多くの被教育者が發奮したことであらう。また、この反對に、師に認められないためにいかに教育の悲劇がくりひろげられたことであらう。教へるといふことより先に、まづ教へようとする對象を知ることが必要である。教育家が對象をよく知ることが、既に教育の成功であり、知るだけで既に半ばは教へたも同様である。

小楠は教育家として、深く門生を知り、この個性に従つて、自發的に發展するやうに仕向けた。小傳にも、あるやうに、「門人の教育も亦、一變して、只性質の長するに従ひ、循々として道に入らしむ。規則儀文を以て之を拘泥せず、而して自立自行、敢て規矩の外に出でざらしむ、常に曰く、規律は死物のみ、死物は以て活人を御す、或は之を外面に行はしむべし、以て隱微の間に行はしむべからず、或は之を門内に行はしむべし、以て門外に行はしむべからず」と、小楠の教育精神を要約してゐる。

はじめから小人物の養成が、小楠の教育目標ではなかつた。小楠は、いつも門生に、すべからず第一等の人物となれと教へたといふことであるが、彼の教育は、すべての人間を天まで伸ばす教育であつた。それがためには、「只性質の長する所に従ひ、循々として道に入らしむ」である。

この只の一字に強い意味がある。そして規則や儀文をもつて之を拘泥しなかつた。自立自行、しかも規矩の外に出でさせなかつた。

なぜ小楠はかくも、個性を尊重したのであらうか。各人の長ずるところは、作爲ではなくて、「天」の與へたものである。この天の與へた特質に従つてこそ、天理に到達することができる。信じたからである。従つて、規則や儀文のやうな人間の細工によつて、この天與の資源を拘束することは、それは教育ではなくて教殺であり、天理に悖ることである。教育が成るも成らざるも、天の作用であり、教育の作用は、人をして自己の天性を自覺せ、これによつて、自力をもつて天理に到達せしめるだけである。だから徒に規律をもつて教育の効果をあげようとしても、それはただ外面的に、学校の門内のみに行はせることはできても、決して門外で行はせることはできない。そののみか、そのために遂には、天與の美質、即ち天に到達する唯一の道を封殺してしまふことさへある。

かかる教育道は、やはり小楠の深い人間理解から來てゐるものであるが、多分に人柄から出たものでもある。

この他、小楠が、教育家としてのよき資質として、多藝多能であつた點もあげなければならぬ。小楠は博學多識、人生のあらゆる分野に對して興味を持ち、多技多能であつた。教育家は、いろいろな個性をを教へ導くものであるから、多角的な人生への理解が必要であり、多面的な教養が必要である。

人生への多角的な興味と理解を持つてゐた小楠は、従つて何人からも學ぼうとした。他藩のものに逢へば、他藩の人情、産業をきき、外國からの歸朝者には海外の事情をきき、また郷里の町人、百姓にも道をきいて倦むことを知らなかつた。沼山津閑居當時の小楠について、海舟が、「樵者田夫に話す、皆先生の言を聞くを楽しみ先生また倦色なく欣々然也、其胸源以て思ふべし」とあるやうに、來るものは拒まず、何ものからでも學ぼうと努めた。彼の博識は決して單に書物からのみ得たものではなく、日常の人につき物についての勉強のたまものであつた。かつて小楠の門下で久留米の人、淺田和三郎の語るところによると、淺田がはじめて入門しようと小楠をたづねた時、久留米餅や茶の製法、産額、販路などをきかれて答へることができないで困つたといふことである。

小楠が、「有朋」の語について述べたところを見ると、「其長を取て學ぶときは世人は皆朋反なり」と次のやうに講じてゐる。

「有朋、此義は學問の味を覺え修行の心盛んなれば、吾方より有徳の人と聞かば遠近親疎の差別なく親しみ近づきて咄し合へば、自然と彼方よりも打解て親しむ、是感應の理なり。此朋の字は學者に限るべからず。誰にてもあれ其長を取て學ぶときは世人は皆吾朋友なり。憧々として往來するの謂にあらず。今一際廣めていへば當節、幕府より米利堅へ遣はされし使節を米人厚く待らひし、其交情の深きにても考へ思ふべし、是感應の理なり、此義を推せば日本に限らず世界中皆我朋友なり」

ひとり世人が朋であるばかりでなく、その人の心の持ち様によつては、世界の人々が悉く吾が

朋であり、教材であるといふのか、小楠の日常哲學であり、教學であつた。

小楠の學問はいはゆる實學であり日常學であつた。

「古人の所謂る學なるもの果して如何と見れば、全く吾が方寸の修行なり。良心を擴充し、日用物の上に功を用ゆれば總て學に非ざるはなし。父子兄弟夫婦の間より、君に仕へ友に交はり、賢に親つき衆を愛するより、百工技藝農商の者を咄し合ひ、山河草木鳥獸に至るまで、其事に即いて其理を解し、其上に書を読みて古人の事歴成法を考へ、義理の究まりなきを知り、

致々として止まず、吾心をして日々靈活ならしむる、是刻ち學問にして修行なり、堯舜も一生修行し給ひしなり。古來聖賢の學なるもの是を合いて何に有らんや」

かうして日常の生活、それ自身が、生きた學問であり、吾が心をして日々靈活ならしむるものが活學問であるといふ小楠は、いかに困難な逆境にあつても、またいかなる寒村僻地にあつても、人生に退屈するやうなことはなかつた。日々のわが心をして靈活ならしめるのが彼の信條であつた。

かういふ人生觀、學問觀の持主である小楠には、門下生もまた。吾が朋であり、同志であり、吾師でもあつた。したがつて教へるといふことは同時に學ぶことであり、ここにいはゆる教學一體の眞の教育境が成立つのである。久留米の淺田は、小楠を師として入門したけれども、小楠にとつては、久留米耕の製法や産額を教へる教師である。淺田はそれを吾師とたのむ小楠からきかれることによつて、自分を認められ知られたよるこびから、また更に久留米耕についてあまりにも無知な自分を反省し、向學研究の心が湧くであらうし、それはやがて、その地方の産業の發達に貢獻するところとなり淺田をして有用の人物たらしめる機縁となるのである。小楠に朋として

遇されることは、淺田を小楠と高さにまで引上げることであり、それが生きた教育となる。

小楠が、教育家として非凡の功績をきづきあげたのは、以上述べたやうな天性の人間としての素質に負ふところは多かつたが、天性の良質とともに卓越した自己努力にあつたことはいふまでもない。彼もまたあらゆる偉人がさうであつたやうに、刻苦勵精、血みどろな自己反省と勉強によつて、天與の資材を磨きあげて、小楠といふ偉人を作り出したのである。

小楠の學問は實學と云はれてゐるが、この實學の意味は、自ら作る學問である。従つて生活の必要から出發して、自己の思索によつて體系化し、これを更に生活の必要に應用し活用するところの活學問である。

されば小楠は、學問のための學問を排して世の利用厚生のための實學を本旨とした。そしてそれは、古聖賢の學問の仕方へのつとつたものである。

これに關する小楠の學問觀は、次の「學而章」の講義のなかに明かにされてゐる。

「學の義如何ん、我心上に就て理解すべし。朱註に委細備はれども其註によつて理解されば則ち朱子の奴隸にして、學の眞意を知らず。後世學者と言へば書を讀み文を作る者を指て云ふ様なれ共、古へを考れば決して左様の義にてはなし、堯舜以來孔子の時にも何ぞ曾て當節の如き許

多の書あらんや。且又古來の聖賢讀書にのみ精を勵み玉ふことも曾て聞ず。……後世の學者日用の上に覺なくして唯書に就て理會す、是古人の學ぶ處を學ぶに非ずして所謂古人の奴隸と云ふ者なり。今朱子を學ばんと思ひなば朱子の學ぶ處如何んと思ふべし、左はなくして朱子の書に就ときは全く朱子の奴隸なり。譬へば詩を作るもの杜甫を學ばんと思ひなば、杜甫の學ぶ處如何と考へ漢魏、六朝まで弄つて可なり。且又尋常の人にて一ト通り道理を聞ては合點すれども、唯一場の説話となり踐履の實なきは口耳三寸の學とやいはん、學者の通患なり。故に學に志すものは至極の道理と思ひなば、尺進あつて寸退すべからず。是眞の修行なり、去るべからず。」

かうした見地からすれば、實學のほか眞の學問はない。學問の奴隸は決して主體的な修行者といふことはできない。

かういふ實學の境地に到達するために、小楠は、思索することの重要性を説いてゐる。井上毅の書いた「沼山對話」のなかには、これを次のやうに述べてゐる。

問、古の學問は後世の學問とは違ひ候哉。書經に堯の徳を稱して文思安々と申したり。此の文思の守學問の眼目にて古の學は皆思の一字に在としられ候。凡そ人心の知覺は誠に限なきものにして、此の知覺ををしひろむれば天下一物として我心に遺す所はなきものに候。心の知覺は即思にあることにて思ふて其筋を會得いたし候えば天下の物理皆我物に相成申ことに候。

問、學問の眼目は思の一字に可有之候得共、學問の業は何を務めいたし候哉。大學に所謂格物即ち古の學問の業なるべく候。其格物と申は天下の理を究ることに即思の用にて候。佛氏の徒も澄心の修行をなして虚心清淨にはなりたれども、此の思を用ざる故に天下の理に昏しと可_レ知候。

然ば古は思を以て學と致し候哉。

左様にて候。一身の修爲より天下經綸の事業に至まで皆思より出候。

論語開卷に學而時習と申候は如何なる教にて候哉。

古の學問は第一己に思ひ思ふてえざる時に是を古人に照し其理を求むるとみえ候。故に其格物の業皆己が誠の思より出候て得る處の理皆實得と相成申候。學而時習は是を古人に照すのことに候。

然ば中庸には何故博學明辯を先して慎思を後にいたし候哉。

博學明辯共に皆思の字の小割にて、其實は思の一字にて學問大端を包めり。全體己に思ふの誠なければ後世の如く幾千卷の書を讀候ても皆帳面しらべになるものに候。先書は字引と知べく候。一通の書を讀得たる後は書を抛て專己に思ふべく候。思ふて得ざるときに是を古人に求め書を開てみるべし。心の誠より物理を求むる處切なれば、必中夜にも起て書を閱するほどになるものに候。右様致し候えば我知覺も日々にひろまり、學問の精神ひたすら増長致すものなり、己に思はざれば學問の益なく、又思ふに是を古人に照さざれば一己の私智になることござ候。故に思而不_レ學刻殆とも有_レ之候。扱又此に一つの知るべきことあり。學問を致すに知ると合點との異なる處ござ候。天下の理萬事萬變なるものに候に徒に知るものは如何に多く知たりとも皆形に滞りて却て應物の活用をなすことあたはざるものに候。合點と申すは此の書を讀て廣て此の理を心に合點いたし候えば、理は我物になりて其書は直ちに糟粕となり候。其我物になりたる以上は別事別様に應ずるにも此の理よく彼に通じて活用致すものに候。此の處よくよく心得べきことに候。

學は思を以て業と致し候が、其思ことには何を以て手始と致すべきや。心の分際は限なきも

のに候えば先宇内を規模といたし候て一天下のことも了解すべく、一天下のことを了解する
文の幅御座候て一國のことをも運用すべく、それより一家一身とつづまり候哉。

幅のかかる處を申せば左様にて候。我思のかかる處宇内にかけて皆我が分内といたし候故宇内
のこと皆我心竊かにひびき候て所謂格物も皆實現に相成不_レ申、我惻怛の誠にひびき候て今日
千緒萬端見聞する處の者皆我心の働と相成候。それ故大學に古之欲_レ明_レ明德於_レ天下_一者はと先
廣大の規模を示され候。

然ば先治_二其國_一先齊_二其家_一と彼れをなすには此より曲尺を取り出し候は如何に候哉。

是は脩行のことにて候。學問の規模は宇宙皆我が内と致すべく候。凡我心の理は六合に亘りて
通ぜざることなく、我が惻怛の誠は宇宙間のこと皆是にひびかざるはなき者に候。世の學者大
抵一偏に拘執せられて我れと我心を狭小にするもの多く候。

誠に宇宙間の理、我分内にて乃格物の用なること敬服仕り候。」

學問とは何であるかに關しては、これらの問答によつて、明かになつたと思ふ。彼の學問は暗
記や博識の學ではなかつた。書物は字引であるといふ見地から、實理實學を尊重し、しかも、「合

點」するまで思念する思想家であつた。小楠は一つの學理でも、わからねば「合點」するまで
は、何年でも考へた。或る時、程子の「道就_二於用_一不_レ是」の一句が、わからないとて、これを
行燈や襖などに手あたり次第に書きつけて三年間考へた末、遂に合點したと弟子に話したといふ
ことである。「文思の字學問の眼目にて古の學は皆思の一字に在ことしられ候」といふ小楠の思
想は、思の哲理であり、考へに考へぬいた學問である。否、「心の知覺即思」を靈活ならしめる
ことが、學問である。

しかし、「思」も獨斷に陥ることがあるので、「是を古人に照さざれば一己の私智になる」ので
ある。

かうして書物につくよりは生きた物事について學ぶ實學の立場をとつたために、小楠の學はあ
くまで、實際的であつた。教育家はどうしても、學者肌よりは實際家肌でなければならぬ。教
育家はいかに萬能の人といへども、被教育者に、すべてを教育する主體とはなり得ない。自己の
學問を傳授するのみではなく、世の中にある學問をいかに修得すべきかを實際に教へるものであ
る。小楠のやうに學ぶことを教へるにすぎない。小楠になるのではなくて、小楠のやうに學ぶ人
を作るにある。「堯舜も一生修行し給ひしなり」といふはそれである。

小楠が専門的な學者としておさまることなく、天下國家の動向を綜合した實際的な學者であつたのは、教育家として成功した所以である。

されば小楠は、「只天と説くのみ」であつた。小楠が到達せんとする理想も、朱子學でも陽明學でもなくて、直ちに堯舜の古道にさかのぼり、天理に到達しようとした。この「天」こそ小楠と門生との教育者である。「天」が教育するのである。教育とは、この「天」の攝理にしたがひ、「天」を亮けることである。

小楠は「天工を亮ける」といふことを説いてゐる。「天工」とは宇宙究竟の目的であり、人生の第一理想である。人間の正しい生活とはこの天工を亮けるにある。

「天」とは何か、「天」に到達するには如何にすべきが、これらに關しては、元田東野の書いた「沼山閑話」(慶應元年秋)のなかに精しく説いてある。

一、宋の大儒天人一體の理を發明し其説論を持す。然ども専ら性命道理の上を説て、天人現在の形體上に就て思惟を缺に似たり。其天と云ふも多く理を云、天を敬すると云も此心を持するを云ふ。格物は物に在るの理を知るを云て總て理の上のみ専らにして堯舜三代の工天とは意味自然に別なるに似たり。堯舜三代の心を用ゆるを見るに其天を畏るの事現在天帝の上にて在せ

る如く、目に視耳に聞く動搖周旋總て天帝の命を受る如く自然に敬畏なり、別に敬と云ふて此心を持するに非ず。故に其物に及ぶも現在天帝の命を受けて天工を廣むるの心得にて山川、草木、鳥獸、貨物に至るまで格物の用を盡して、地を開き野を經し厚生利用至らざる事なし。水、火、木、金、土、穀各功用を盡して天地の土漏ること無し。是現在此天帝を敬し現在此天工を亮る經綸の大なる如し之。宋儒治道を論ずるに三代の經綸の如きを聞かず。其證には近世西洋航海道開け、四海百貨交道の日に至りて經綸の道是を宋儒に徴するに符合する所有る可きに、一として是れ無きは何なる故に乎。然るに堯舜三代に徴するに一に符合すること書に載る所の如し、堯舜をして當世に生ぜしめば西洋の砲艦器械百工の精技術の功疾く其の功用を盡して當世を經綸し天工を廣め玉ふこと、西洋の及ぶ可に非ず、是れ堯舜三代の畏天經國と宋儒の性命道德とは意味自ら別なる所あるに似たり。張橫渠、西銘の合點はあれども、是も道理を推演して合點と覺ゆるなり。治道事も封建をするの井田を興すと云論あれども、是後世に廢れたる古法を彊て興さんとしても人情にも叶はず却て益なかる可し。三代の如く現在天工を亮くるの格物あらば、封建井田を興さずとも別に利用厚生之道は水、火、木、金、土、穀の六府に就て西洋に聞けたる如き百貨の道疾く宋の世に開く可き道あるべきなり。時世古今の別あれば

今日の様には開け間布くも其講究義迹はいくらかも説話の残りなる可けれども是れ無きは全く三代治道の格物と宋儒の格物とは意味合の至らざる處有る可し。一草一木皆有理須格之とは聞えたれども是れも草木生殖を遂げて民生の用を達する様の格物とは思はれず、何にも理をつめて見ての格物と聞えたり。大儒を批議するには非ず、後學のもの徒に理學の説話にのみ奔りて現在天人一體の合點なければ大源頭に狂ひありて事實の上に於て道を得ざる事多し。能々合點す可き事なり。

一、人は三段階有ると知る可し。總て天は性古來今不易の一天なり。人は天中の一小天にて、我より以上の前人、我以後の後人と此三段の人を合せて初て一天の全體を成すなり。故に我より前人は我前世の天工を亮けて我に譲れり。我之を繼で我後人に譲る。後人は是を繼で其又後人に譲れり。前生、今生、後世の三段あれども皆我一天中の子にして此三人有りて天帝の命を任課するなり。仲尼祖述堯舜繼前聖開來學、是孔子のみに限らず。人と生れては人々天に事ふる職務なり。身形は我一生の假託、身形は變々生々にして此道は往古來今一致なり。故に天に事ふるよりの外、何ぞ利害禍福榮辱死生の欲に迷ふことあらん乎。

一、西洋の學は唯事業之上の學にて、心徳上の學に非ず。故に君子となく小人となく上下とな

く唯事業の學なる故に事業は益々開けしなり。其心徳の學なき故に人情に亘る事を知らず、交易談判も事實的約束を詰るまでにて其詰る處ついに戦争となる。戦争となりても事實を詰めて又償金和好となる。人情を知らば戦争も停む可き道あるべし、華盛頓一人は、此處に見識ありて人情を知らば當世に到りては戦争は止む可きなり。天守教の如きは西洋も本意に非ず。此の邦の佛教の如し。唯以是喻愚民の一法に備ふるのみ。

一、我れ誠意を盡し道理を明かにして言はんのみ。聞くと聞かざるとは人に在り、亦安ぞ其人の聞ざること知らん。豫め計て言されば其人を失ふ、言ふて聞ざるを強く是を誣ふるは我言を失ふなり。孔子沐浴而朝の一章是當世に處する標準なり。

一、誠と信と意味は別なり。誠は本然の眞實源頭より湧出す、工夫を用ひず。信は發於己而自盡之謂、誠に至るの道なり。吾輩道理を見ても心はまだ誠ならず。自ら勉て是れを行ふ是信の工夫なり。信なくして何ぞ誠に至らん乎。

一、人常に云長所短所ありと、然らず。長所は其人の道心の全き所、短所は其人の心の雜なる所なり。故に剛なる底の人は到底剛の善、柔なる底の人は到底柔の善。其短所は剛も柔も均く是人欲の雜なり。」

読んで味はうべき言葉が多いが、要するに小楠の思想は、天を極點として、天工を受け、天工に參與するを人の道としてゐる。教育とは、天賦の性を存養し、愛育し天命に奉從して、眞に天に奉仕することである。小楠が、勝海舟に與へた詩に、

帝は生ず萬物の靈

靈をして天工を亮けしむ

所以に志趣は大

神は飛ぶ六合の中

[260]

とあるが、天人一體の理想は、小楠の教育精神であり、また不動の信仰であつた。

小楠はかかる信仰の上に立つて、堂々、その逆境を戦ひ抜いたのである。「天人一體の合點なければ大源頭に狂ひありて事實の上に於て道を得ざる事多し」といふのは、小楠の不壞の信念であつた。この信念の發動するところ、禍もまた福となり、逆境も順境となり、戦ひは勝利の道となつた。小楠の全生涯を顧みるときは、誰も平和で幸福な生涯とは思はないであらう。しかし、

小楠が、いかなる逆境にあつても、心は光風霽月のやうに、明朗に敢闘して運命をきり開いて行つたのは、この信仰の力であり小楠の生涯それ自身が、なによりも有力な教育資料である。結局、天與の小楠を完成することが、小楠の教育であつた。

前にも述べた通り、小楠には、「文武一途の説」があり、「國是三論」のなかにある「士道論」にも、やはり、文武一體の理を説いてゐる。この文武一體観こそ、小楠の教育思想の中軸をなすものであり、また小楠自らも、文武一體の生活を實現しようとして、文學とともに武術に對しても、修練を怠らなかつた。そして、數人を相手として老軀に鞭ち短刀をもつて防戦した最後の姿は、やはり文武一體の最後の表現であつたであらう。

[261]

今日、西洋流の教育思想が、いはゆる植民地型として清算超克さるべきとき、われわれはいかなる日本的形態の教育思想を建設すべきかは、教育界の最大の問題であるが、思ふに文武一體、修文練武の教育こそ、教育建設への一つの契機となるものではあるまいか。この意味からも、われわれの先覺者が、文武一體観を確立してゐた過去の業績は、省察されねばならない。小楠の文武一體観は、その天人一體観とつながり、儒教主義に基くものであることは勿論であるが、しかしやはり當時の世の教育觀に對する批判から生れたものである。

國民皆兵といひ、國家總力戦といはれる今日、はたして小楠のいはゆる「眞文眞武」の世界觀が、國民の間に確立されてゐるであらうか。また國民教育の任にあたる教育者の間に、文武一途の教育觀が、形成されてゐるであらうか。文武一體の眞教育の建設こそ、現代の教師、わけて青年教師に課せられた新しい使命であり、それはまた新しい生活を建設するための根本態度であらう。この頃、軍部の言葉や文章が、文學者の間に新しい問題を提供してゐるやうであるが、それなども日本文學建設への契機となるものであらう。

小楠の教育觀の概觀を終るにあたり、次に「小楠遺稿」のなかにある「文武一途の説」と「士道論」の全文をかかけて置く。

文武一途の説 嘉永六正月

和漢古今儒者ト武人ト全ク區域ヲ別ニシテ人心ノ聰明ヲ盡ギルノ通病ヲ醒悟シタル書ナリ。

有ニ文備ニ者必有ニ武備ニと申して古の聖賢は大英雄大豪傑にて在ましけり。禹の洪水を治め玉ふに手足たこを生ずる程に自ら働き、成湯、伊尹、文武、周公は雨に浴し風に櫛り自ら干戈を執り天下の亂を鎮め玉ひしは如何なる英雄豪傑の業なるぞや。孔子、孟子の時に用ひられ玉は

ば天下の亂臣賊子を誅し、四浦の判亂を平げ、いかめしき業思やられ侍る。朱子曰、有ニ豪傑面不ニ聖賢ニ者、未レ有ニ聖賢而不ニ豪傑ニ者也。此言聖賢の心術を盡し又限りなき感慨の心を寓しぬ。抑後の世に成りては文武兩端に分れ、眞儒君子と稱せらるる人も武事に疎く、撥亂反正の大事を成すこと能はず。去れば四海波立ぬる時は干戈を執り三軍を指揮し天下の亂を鎮むるは別に其人ありて英雄豪傑の存す業となりて、世の儒者の道は治亂常變に通じ天下有用の道とは云ふ可からず。其上治れる世なれども武事弱り士氣衰ては何を以て其治を保んや。是必亂に趣く勢にて、和漢古今亡國のためし歴々として明白なれば、武は唯亂を鎮の道と思ふは甚だ愚かならずや。しかはあれ共、武の一途を以て人の道と心得、治にも亂にも是を以て國を治めんと欲するは其弊更に甚だしく、云ふ可からざるの禍を生ずる必定せり。朱子陳龍川に告る言に云眞正大英雄人却從ニ戰々競々ニ臨ニ深履ニ薄倣將出來、若是氣血鹿豪却一點使ニ不著也。是は龍川が其世の衰弱學者の事を成すに足らざる弊習を見て、漢、唐以來の英雄豪傑を以て自ら任じ、却て朱子の學を迂濶無用に付しより角く頂門の一鍼を下し戒られたる言なり。熟、當今天下の勢を見るに太平殆んど三百年に垂として綱紀の陵夷民俗の傾廢は申も愚かなれ。士氣の衰弊に至りては我邦往古以來今日より甚しきは無レ之、彼南宋の衰弱は同様相憐とも云ふべけれ、

況又洋夷の惡氣計り難きの憂迫りたるは又彼の全虜の勢強大なると同じ。然るに學者たる者文武一途の道に志さず、熟、時勢の有様をながめやりて是を救ふの見識力量なし。是に於て世を憂ふるの人傑出る時は一切學者を以て迂濶無用と押し付け、専ら武の一途を以て國を起さんと欲するは龍川が見と符節を合せずして同じ。此説行はるる時は譬ば激劑を以て病毒を討つが如し、一旦に士氣を張り一旦に武奇功を奏するの勢あるは必定なれ共、元來仁義忠誠の心術を磨く正心誠意の上より推し本き來らざれば、其弊忽に生じ、或は客氣龜暴の手荒き風と成り、或は横變功用の拙き術とも流れて其末終に如何とも成し難き勢に落入るは鏡に懸て見る如し、去れば道は體用本末文武一途に行はるるにあらざれば眞の道とは云ふ可からず。苟も眞正の道を學び天下國家の大憂を抱くものは仁義忠誠の心術を磨き一點氣血の龜暴に馳せず、小心謹畏深く事を慮り必ず中正至當の理を得んと欲するは固より申にも不_レ及、劍槍、炮馬の業は此の武士の身の職分なれば力を極めて習練し、或は山野に狩りし、或は川海に漁り、雨に浴し風に櫛り筋骨を逞ふし心體を健になす業は日として怠らず月として忘れず、鬼取り拉ぐ武夫の矢竹心の一筋なるは古の武士にも劣らず、又彼の三軍を指揮し夷賊を齧粉にする兵の法を究て、百勝の道を得て亂を鎮め治を致す英雄豪傑の事業は尤我が學術の一大事なれば元龜、天正の弓矢の

道を本にして彼の西洋の夷賊等がもてはやす兵器陣法に至るまで具に其理を究て、短を捨て長を取り習熟心得するにあらざれば、聖賢の道を學ぶの儒者とは云ふ可からず。司馬德操の云儒生俗士何議_二時務_一、識_二時務_一在_二俊傑_一と、此の俊傑なるものを古今學者が外様に見せばこそ儒生俗士と並べ稱して迂濶無用とは識らるるなれ。諸葛武侯は草廬の中に在りて天下三分の大略を定て、用ひらるるに及び果して其言に背かず、朱子平生の義氣天下の人心を感動し、尤も兵事に分曉なるは其書を見て明かなり。擧て三軍の司命ならば樂毅、諸葛の兵たるもの誰か疑を容る可けんや。況や韓兵は申にや及ばん、中興恢復の大業鏡に懸て見よりも明かなり。是其平生習學の力にして所謂眞正の大英雄人とは武侯、朱子の外に又誰ありてぞ稱す可きや。然れば朱子を學ぶものの武事に疎く治亂常變に通ぜざるは腐儒なれ俗士なれ迂濶無用の學者にて、今の德操たらん人の笑ひを取るは此學の大なる耻ならずや。記して同學の諸君子に告ぐと云爾。

士 道 論

文武は士たる者の職分にして治道の要領たる事は誰しも稱道する處なれ共、今其文と指す者は經史に通じ古今に渉る藝にして多くは空理に入り博通に流れ、其數は記誦詞章に止る。其武と

稱する者は馬を馳せ劍を試る術にして、徒に意味を談じ商妙を説き、或は刺撃猛烈を尙び甚敷は勝敗を競ふるに至る。是故に學者は武人の迂濶龐暴にして用ふるに足らざるを鄙しめ、武人は學者の高慢柔弱にして事に堪へざるを嘲り互に相容れず、治具却て争端を啓き矛盾を事とするは、日本國中の通弊にして其道の原頭明らかならざるに止れり。唯國を治るに文武を以てするといへる虚聲に吠えて其實理を舛察せざる故、今の文武は相争ふの媒となるのみにて治を圖るに用ゆべからず。さらば其眞文眞武は如何といふに、文武といへる事の古へ物に見えたるは書の大禹謨に帝舜の徳を稱述して乃聖乃神乃武乃文といへり、是ぞ眞の武文の本義にして當時讀むべきの典故習ふべきの武伎あるべくもあらず唯其聖徳の外に發せるを指し其仁義剛柔を形容して文武と云、素より徳性による事にて決して藝術杯に關はるべき事にあらざるは勿論なり。後世是を分判して兩途を立たるは大に古意に戻れるなり。本朝も中古争亂の時に當つても有識の將士は權謀、智術、強勇而已を以て衆を服し國を治るに足らざるを悟り、心を雨矢霰彈の中に治め臍を千槩萬刀の下に練り、自ら反して己を修め人を治るの方法を工夫自得せる故克く開國創業の功を成し或は輔翼養成の勳を建たり。是尙武の本意心術に在て伎藝にあらざる所以にして、加藤清正主の大十文字、本多忠勝主の蜻蛉切師傳あつて修行せられしといふ事も聞

かされども、一心の鍛錬より發して先登陷陣八面無敵武名を汗青に傳へる君を輔け亂を撥ふの功業一時を掩ひしも皆武道の致す所にして武術の所爲にあらざるを見るべし。今の武術の興るや織、豊二氏の時に當て天下寢定り戦争特に息まんとす。於是上泉氏を初め鎗其他の武伎に精絶せる徒各流祖と成て戰鬪の實地に擬て其技術を傳へ心を死生の外に鍛錬する事を教ゆ。天下の將士も己に心を實戰の地に鍛錬する事を得ず。依て昔時其伎に長ぜる者は必時事に達す。就中北條房州、小幡景憲の兵理を説く、専ら經綸に任して行伍進退に止らず。柳生但州の獻廟に社へて大政に參預し、宮本武藏の細川家に賓師として國事を謀りし如き、皆一時の人材俊傑にして後世の兵家武人を以て稱する類にあらず。武藏の武を教ゆるを聞くに一向心法に本づき、反求、克己、齊家、治國士道の本意を講究するを常とす。然れども空手の坐論而已にては禪家の觀法に類し空理に落るを以て、時としては敵手に逢ひ刺撃に當り學ぶ處の心術の治否を鍛錬せしむ。故に木太刀の演習は一月中僅に六次にして、其他は武士たるの實體を講習切磋せし事とぞ。唯武藏のみならず、當時の武人大約如此なりしは各其傳書の奥旨を見て知るべし。乍併亂後不文の世態理を説き道を談するに多くは手を佛氏に假れるを以て、止むことを得ず、佛理に似たるも亦尠からず。古人武を學んで文なる事概如此なりき。爾後昇平久敷に隨ひ文

華日々に開け文學を業とする者出來りて就て學ぶ者多し。依_レ之武人と稱する者多くは文盲にして偏武の伎藝に局し、且只管其術の精妙を得んと欲するを終身の務とし、有文の世に生れて一丁字を知らず、其拙劣を極むれども敢て羞辱たる事を知らず、撫_レ劍疾視唯敵に勝て君恩に報ぜん事を志願とし、其汗れるに至て數家の許狀を得て名を干め職に就くの階梯となさん事を心とするに至れるは痛歎の極といふべし、近世文化頃熊本の藩に長沼十郎左衛門といへる寶藏院流槍術の師範あり、頗有識の士にして槍術に長じ、十九歳の時父の印可を得て其以來は槍を執つて演習せし事なく専ら心法を鍛鍊し、日々門弟子を集め士道を講究し不文にしては智に闇らく理を窮むるに足らざるを悟つて、門人と共に經史を學び徳性を原ね事務を論じ、其道を窮め其術を試験せしかば、百余人の門人中遂に十二三人の人材を生じ各其の伎に精しきは元よりにて皆公に奉て要路に當り顯職に庸られて政教の裨益となれり。其子十郎助槍術は殆精妙を極むれども、父の心法を傳へ得ざるを以て門人と議して師範を辭退せり、是等古の武に近くして師弟共に士道の要を得たりといふべし。凡天下國家を治るに治亂共に人を得るに非れば難し。人を得るは文武の道に非ざれば難し、於是古今人皆文武の道人材を教育するの樞紐たる事を知れども、其文武の本然心法に因る事を會せざる故、今の文武を以て人材を得んと欲するは譬

へば砂を蒸して飯とせんと欲する如くなれば、人材は愈得がたくして國家の治らざる事知るべし。

或問、今文武の道を説くに一向に武を論じて文に及ばざるは如何。

答曰、文を説き武を説く即文武の岐する所以にして、文武本一源なるを知らざればなり。素より尙武の御國風なるが故に、今世政令惣て、幕府に出で、將士共に武家と稱し武士と呼び、武を以て名とするにあらずや。されば武家に生るる者は胎内より武士にして、物の心をすれば即武士たる事を知るは皆氣の自然なる故、教も亦自然に隨ふて武を以てすべき事にて、武を離れて士道ある事なければなり。然るを人皆武を以て刀槍、弓馬等の伎藝とする故に、又文學を以て對せざれば偏廢の恐あるが故に、脩文、講武を口實となし、學校を設け子弟を業に就かしめ文を以て義理を明らかにし治道を裨け、武を以て勇闘を習はし身躰を強健にして不虞に備んを欲するは列藩の中に於て有道と稱する國々の通例なれども、文武共に其本義を失へば、學校によつて人材輩出の功效ある事なく、却て志氣の扞格騷擾を招くもの多し、是皆文武の原頭を明かにせずして其末藝によれるの大弊なり。元來武は士道の本體なれば、已に克く其武士たるを知れば武士道をしらすしてはあるまじきを知り、其武士道を知らんと欲すれば綱常に本付き上

は君父に事ふるより下は朋友に交るに至り家を齋へ國を治るの道を講究せざる事を得ず、已に其意を知れども是を事業に徹し其至當を得ざれば治教に補ひなきを以て自反、力行、精勵、刻苦心法を練つて是を一撃死生を決するの伎術に驗し、百折千磨且練り且試み、たとひ天地反覆の變亂に處しても一心靜定士道を執て差錯なからん事を欲す。於是道理を聖經に求め治亂を史傳に檢せざる事を得ざるに至るは自然の勢にして、武を説て文に及ばざれども文武の内に寓して武の文たる所以なり。如此なれば人得強るに道を以てせずして人自ら道を信ず。是を以て力を武道に盡せば學校の施設を假らずして文武並び行はるる事を知るべし。

問、三代の聖徳も學校を設けて教を爲せし由なるに、今學校の治教に益なきが如くいへるは如何。

曰、三代の學校の大意は大學の序にも見えたる如く洒掃應對より始て脩己治人の道を教ゆるに惣て徳性の固有に本つき人たる職分を盡さしむるまでにて一ツとして強爲に亘る事なし。今の學校は經史を記誦講論し武術を演習鍛錬する道場にして法を立制を設け智術を以て諸士子弟を驅て強て業に就かしむ、依之人々の長所に任せて或は文學或は武伎互に黨派を分つて學校中に相争ふ。是故に文に文の用なく、武に武の實ある事なし、學校の名は三代に同じけれども

教を爲すに至つては天淵の差違あり、學校も三代の學校などには間然すべきなければ、學校の名を惡むにはあらず、唯今の學校の治教に益なき事如此なるをいふなり。

問、文武の心法に本づくべき事なるを今の文武は藝術に落て實用なしといへど文學をせずして孝悌忠信の道を知るによしなし。武術學はずしては武士の本業を遺るるに非ずや。是を藝術なればとて棄たらんには士たる者文もなく武も知らず不學無術の者にこそなるべけれ、且武術を以て心法を鍊るを事とせば、唯々さへ懶惰柔弱にして、勞役を厭ひ業合を勤めず、劇敷事となりては暫しこそあれやがて拳亂れ氣息絶る族も坐上に高妙の意味を談論して、高手名人の面持して俗人に誇るも多かる氣習なれば心法の説恐らくは、其徒の局套に落て口實となり遂には兒戲同様の形計にや成行きなん、又術を鄙み棄る事となりては武人の筋力を強くし躰氣を盛んにすべき業もなくなりて、何を以重圍を衝き君を萬死の中に救ふ如き力役に服すべきや。

曰、凡人と生れては必父母あり。士となりては必ず君あり。君父に事るに忠孝を竭すへきは人の人たる道なる事を知るは固有の天性にして教を待て知るに非ず、其道を盡さん事を思ふよりして徳性に本つき條理に求め、是を有道に正すは文の事也、且心を治め其膽を鍊り是を伎藝に驗み事業を試るは武の事也、試業の姿は今右様に異なる事なけれど術に絶りて心を治めんと

すると心に與つて術に試ると其原頭に本末の差違あり。今の文武、是譬は源の濁れるを措て末流より清ましめんとするが如し。其本源を誤り來れば治亂に益なき事勿論なり。古人の心法により精粕を嘗め伎術を差置て唯高妙を談するは素より空論にしていふに足らず、伎によつて武人の強壯を求むるといへるも亦非なり。今身體の強健を是とせば漁樵農夫に如くものあるへからず、嚴寒を冒し難苦に堪ゆ、士人の及ぶ處にあらず、中に就て其丁壯を選び武伎を訓練する事三四月、節制を設て敵に當らは堅きを推き鋭を挫く事恐くは士人に勝るへし、士人もし強壯正事とせば山野に狩し河川に漁し身を雨露霜雪に曝さは演武場中霎時の試業に勝る事萬々なるへし、もし又たとひ武伎によつて強健農樵に異ならざるに至るとも別に士たるの道を辨ふることなくんは畢竟農樵同等の鄭夫なり、農樵は力を勞し上を喰ふの職を曠ふせざるに士として武道に闇らく下を治るの職分を盡す事能はずんは農夫にたも劣りて豈武士と稱する事を得んや。今の文武に咎あるにあらざれば、士たるもの今に倍して精勵すべき事なれとも、其學ぶ所以の方法其原頭を誤る時は勞して功なきのみならず、弊害又尠少なからざるをいふなり、敢て藝術を棄べしといふにはあらず、惣て今の儘にてあるべきは勿論なり。

問、君父に忠孝を竭するも武士の武士たる道を知るも天性とはいへど教によらずしてはあるべ

からず、其教は學校の設より成立べき事なるに其學校をも建す學問にもよらず、何を以て人々をして文武の眞義を會得せしむべきや。


曰、治教は三代に法るべき事にて三代は大聖上に在り、大賢下に居て教を敷故に學校の設けも治道を補て人材を出すに足れり、今の君臣才徳たとへ三代に及ばずとも、治教は三代を目當とするの外なければ君相共に文武の道の離るべからざるを辨認して人君は上に在て慈愛恭儉公明正大の心を操つて是を古聖賢に質し、是れを武備に練り是を聖教に施すに性情に本つき彙倫により至誠惻怛を以て臣僚を率ひ黍庶を治む。執政大夫は此人君の心を辨して憂國愛君の誠を立て驕傲の私に克ち節儉の徳を修め心志を苦しめ疥膚を勞し、艱難に屈せず危險に懼れず力を盡し身を致し士道の要領必如此にして遺憾なきの轍迹を履んで身を以て衆に先だち怛懷無我言を容れ人に取るの良心を推して諸有司に議つて人君の盛意を奉行し善を擧て不能を教ゆ、諸有司も亦君相の意を稟て敢て己我の會を挟まず、忠誠無二俛焉として各力を其職分に盡し廉介正直共に士道を執て其僚屬を獎勵し、公に奉し下を治む、又武術の師範に諭して其蒙昧を啓らき固執鄙野の陋習を去て上君相に視て門弟子を誘ふに眞文眞武を以てし治教を裨益せん事を誨ゆ、如此なれば文武の教學校の政已に廟堂の上に立を以て、臣僚自から道に嚮ひ士道を盡さん事を

出文協承認ア70470番
 (日出文協會員番號109001番)

發行所
 東京市本郷區
 元町二丁目二十一

啓文社

電話 小石川五五二九番
 振替口座東京五七五九番



昭和十七年九月八日印
 昭和十七年九月廿八日發行

〔二〇〇部〕
 横井小楠奥付

定價貳圓

著者
上田庄三郎

發行者
東京市本郷區元町二ノ二一
生地龍太郎

印刷者
東京市小石川區指ヶ谷町四
大山輝彦

所刷印堂書文

九日丁二町路淡區田神市京東
 社會式株給配版出本日 元給配

思ふは自然の勢にして人々君相の心を心とするに至れば經史を閱し刀槍を試る皆淵源あつて空
 文偏武の伎能に流れず、悉く其用を爲さすといふ事なく、是を眞文眞武の治教にして風俗、淳
 厚、質實に歸し、人材も亦是より出ん事何の疑かあるべき。」

(終り)

279A5

版 出 社 文 啓

人間吉田松陰 上田庄三郎著 B六判上製四六〇頁 定價二・五〇送二〇

賴 山 陽 上田庄三郎著 B六判上製三〇〇頁 定價二・〇〇送一五

橫 井 小 楠 上田庄三郎著 B六判上製二八〇頁 定價二・〇〇送一五

青年教師 吉田松陰 上田庄三郎著 B六判上製三八〇頁 定價一・八〇送二〇

青年教師 石川啄木 上田庄三郎著 B六判上製三〇〇頁 定價一・八〇送二〇

女 教 師 論 上田庄三郎著 B六判上製三〇〇頁 定價一・八〇送一五

青年教師論 上田庄三郎著 B六判上製三〇〇頁 定價二・〇〇送二〇

終